

トロイメライのあとで

鉋手

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中学生の頃のよしみでルームシェアをしている有理奈（ゆりな）と青空（せいら）。どことなく距離のある生活を送る中、青空の声が出なくなったことで二人の関係に変化が生じていく。

# 目次

トロイメライのあとで

1



## トロイメライのあとで

『この世界は誰しにも苦しみを与える。』そう言った誰かがいた。

確かにそうだと思う。この世には苦勞や困難を経験しない人間などいないのだから。もしかするとその全てが人生にとつては必要な要素であり、それ故に私達はそうなるように生まれてきたのではとさえ思う。

けれど、私は思うのだ。誰にでも苦しみは等しく訪れるとしても、その苦しみの大きさは等しいものではないのだと。私達に幸と不幸を与える存在がいるとするならば、きつととんでもなく不公平で意地の悪い者なのだろう、と。

眠い目をこすりながら布団から出るとフローリングの床の冷たさに目を開かされた。大学ではもう春休みが明けて新しい年度になったというのに、こここの朝にはまだ木枯らしの寒さが居座っている。この町で数度の春を過ごしてきたけれど、このしんと張り詰めた空気には何年経っても馴染めそうになかった。

布団を畳んで廊下への扉を開く頃には意識はもうすっかり覚めていた。扉を出てすぐ右にある台所にはほの暖かい空気と共に、煮干しの出汁が利いた味噌汁の香りが漂っ

ていた。そしてその壁際に取り付けられたシンクにはゆだった鍋と二人分の食器、そしてルームメイトの藤崎青空の姿があった。

「おはよう、青空」

青空は白飯をよそう手を止めてこちらを振り返り、『おはよう』の代わりに小さく微笑んだ。彼女はいつも私よりもずっと早い時間に起きて朝食を作ってくれている。

ここでの暮らしで私もある程度は手の込んだ料理も作れるようにはなったものの、自分で調理した物はどうにも薄味でなんだか好きになれなかった。そんな折に食べた彼女の料理はひどく懐かしい味がしたものだ。

それから二人で茶碗や皿やらをダイニングへと運び、少し狭い食卓を囲む。食器に調味料、後はコップが二つも並べばそれ以上はもう何も置くことができないような、小さくて所々に錆の浮いた円形のテーブルだ。

「やっぱり、新しいテーブルに買い換えようかな」

高校へ進学する為にこの部屋に越して来てからかれこれ四年弱、ことあるごとにこう言ってはいるが、どこかが壊れている訳でもないのだから購入まで踏み切れない。この部屋のほとんどの家具が元々は一人暮らしの為に買い揃えた物なので、もう一人増えるかどうかにも不便さが目立ってしまう。

「それじゃあ、いただきます」

予定の有無に関わらず三度の食事はできる限り二人で。それが共同生活を営む上で最初に決めたルールだった。一緒に暮らすようになって初めて気付いたのだが、青空は手を合わせる時には必ず目を閉じる。あの頃はあれだけ顔を突き合わせていたはずなのに、なぜかあの時の私にはそれが見えていなかった。

青空とは小中学生の頃の同級生だった。様々な事情から高校では離れ離れになってしまったけれど、心のどこかでは私達の関係は何も変わりはないと、疑いもせずによく考えていた。きっと青空も同じだった。そのはずなのに、高校へ通いだして一度目の夏を迎える頃にはもう互いに違う景色の中にいた。同じ部屋の同じ窓辺で雨だれを数えていた彼女には彼女の世界が、町の灯を見つめていた私には私の世界ができたのだ。そして私達は互いの世界から遠ざかっていき、いつしかその姿が見えなくなってしまった。遠く離れてしまったあの赤い屋根の一軒家までの道のりはしっかりと覚えていたまま。

だから、大学の合格者一覧の掲示板の前で彼女と出会ったのは本当に偶然のことだった。その時は何か天運じみたものすら感じた。そこで下宿先を探していた彼女に既に部屋を借りていた私がルームシェアを提案して今日にまで至る。二人で棲むには何かと手狭な部屋だが、こうして何とか今日まで上手くやってきている。

『弁護側は事件当時、被告は心神喪失の状態にあり、責任能力は無かったと無罪を主張

しています』

情報番組のアナウンサーが機械的に読み上げる。元からそうだったのか、それとも私の心持ちが変わったせいなのかは分からないが久しく良いニュースというものを聞いていない気がする。こちらとしては今日の天気だけが気がかりなのだが、どうにもこういう話題には耳ざとくなってしまう。

「今日は一時限目と二時限目に講義があるだけだから、たぶん昼過ぎには帰ってこられると思う。そっちの帰りは夕方頃だったっけ？」

青空は出汗巻き卵を口に運びながらこくりと小さく頭を傾けた。初めての新学期といってもそう大して去年までとさして変わらないものだ。コルクボードに吊るしたカレンダーに目を向ける。時の流れというものは早いもので、何が起ころうと素知らぬ顔で時雨のように過ぎていく。このカレンダーを買ったのもついこの間のことだと思っていたのにあつという間に一年の三分の一近くが過ぎていた。

「じゃあ夕飯は私が作っておくよ」

たしか賞費期限の近い豚肉と玉ねぎがあつたはずだから今日は肉じゃがでも作ることにしよう。それともうそろそろ醤油が無くなるはずなので、大学から帰るついでにも買いに行かなければ。自分以外に作った料理を食べてくれる人がいるというだけで献立を考えるのも楽しくなる。



『そもそも人間の精神というものは可視的に存在するものではないのですから、そこにメスを入れて病気だとか病気でないとか診断すること自体がおかしな話なんですよ。やれ鬱病だのPTSDだの、彼らはいったい何を証拠に病気だと診断しているのでしょうか。あのようなのはただ本人がそう言っているというだけで適当に当てはめているのだから…』

『そうは言いますがね、フロイトが示したように心の病というのは確かに存在するんです。あなたは精神医学そのものを否定するつもりですか？我が国のみならず、この世界にいったいどれだけの数の方々が今も精神疾患に苦しんでいらつしやると…』

テレビのスイッチを切るとあれだけうるさかったコメンテーターの人達が一斉に静かになった。朝から嫌なものを見てしまった。視線を戻すと青空は居心地が悪いような申し訳ないような表情で俯いて味噌汁に手をつけていた。彼女にこんな顔をさせたのは彼らだったのか、それとも私だったのか。こういう時に心の声が聴こえたらどれほどよいだろう。なんともやるせがなくて、私も彼女と同じようにした。

食器や調理器具は全て私が洗った。本来なら今日は当番の日ではなかったけれど、どうにもできない気まずさと無力感を覚えて逃げるように台所に立ったのだった。青空も同じように思ったのか、今は自室に戻っている。あの部屋は私の寝室であったが、私が寝る場所をダイニングに移したことで彼女の自室と寝室を兼ねるようになった。食

器の立てる音がいやに耳につく。先程までそこにあった温もりはもうどこにも無かった。

「やっぱり、あの頃とは違うんだな」

蛇口を捻る片手間にそう呟く。その声はどこへも行かずにクリーム色の壁に吸い込まれていった。最近はずっとこんな調子だ。ほんの僅かな歪みは真昼の空の星のように、目には見えていなくても確かにそこにあったのだった。それが露呈しただけなのに、それだけでもう私には彼女が分からなくなってしまった。

青空と私は同じ小学校と中学校に通っていた。青空が小学校に通い始めるよりも前に彼女の母親は家を出て行った。私は両親のどちらからも愛されていなかった。形こそ違えど同じ家族のことで痛みを抱えていた私達は、互いにとって単なる友人の内の人などではない大切な存在であった。私達にとつてはあの町の片隅にある、あの広すぎた家の小さな一室だけがこの世界の全てだった。あの部屋の中でだけは私達は一人ぼっちではなかった。例え他の誰にも理解されなくても決して悲しくはなかったし、それだけで十分だと信じていた。しかし私達は変わってしまった。彼女も私も、自分のままで。だから、もう『あの頃』には戻れない。あの夜に交わした約束は果たされても、誓った二人はここにはいない。私達は確かにここに存在しているはずなのに、どこにもいなかった。

「もし同じ高校に通えていたら、もう少し違っていたのかな…」

こんなことをした所で何の意味もありはしないと分かっているのに、つい選ばれなかった方の未来を考えてしまう。もしも私が一度でも彼女の元を訪れていたのならばと。もしもあの丸いテーブルにあと一人分のゆとりがあったのならば、と。

「…もうこんな時間か」

地の薄いタオルで水気を払い、椅子の上に置いていた鞆を肩にかける。隙間風と冷たい水で赤く焼けた指先がじんじんと痛む。やはり今年も春の訪れはまだもう少し先になるのだろうか。

「ごめん、もう行かなくちゃ。悪いけど、台所の洗い物が乾いたら食器棚にしまっておいてくれない？」

通り過ぎざまに青空の部屋へ呼びかけてから靴を履く。玄関の芳香剤が減ってきていたのでついでも買って買っておこう。青空が来るまではこんな物が必要とさえ思わなかったのに、今では自然とどんな香りがいいたろうとまで考えていた。

靴紐を結び終えた時、彼女の部屋の扉が開いた。きつと見送りに来てくれたのだろう。『行ってきます』と『ただいま』は必ず言うこと。これもまた彼女と決めたことの一つだった。

「大学の帰りに買い出しに寄るけど、何か食べたい物とか欲しい物とかはある？」

青空は首を振った。元々自分の欲や感情を表に出そうとしない性分ではあったが、負い目のようなものを感じているのだろうか、あの日を迎えてからは輪をかけてそのきらいがひどくなつたような気がする。

「そっか。じゃあ、昼食はいつも通り、食堂の窓際の席で。それと、今日は結花も一緒になるかもしれない。後は：特に無いかな。じゃあ、行つてきます」  
『行つてらっしゃい』

彼女は口に出す代わりにポケットから取り出した手帳にそう書いて、それを私に見せた。日に日に積もつていくそれらの言葉がじきに三冊目の最後の頁を埋めようとしていた。

これが私達にとってのふつうの光景だ。青空は声を出すことができない。そのため、こういう形でしか自分の思いや感情を伝えられないのだ。『おはよう』も『いただきます』も、『行つてきます』や『行つてらっしゃい』も、どれもが一つ足りない、いつもの朝だ。

それは年が明けて間も無い一月のことだった。あの時はまだ冬休みの最中だった。いったい何が彼女に起こつたのか、その経緯について私が知りえることは何一つとして無い。本当の事は彼女一人だけが知っている。

その前日、青空は実家への帰省から戻つて来た。ちょうど雪にはならなかつた雨が夜

に溶けだしていく雲の合間を滑り落ちだした頃だった。着崩れてあちこちに皺のできた服や湿り気を帯びた髪をそのままに、青空は無機質でつきはぎだらけな『ただいま』という声を連れてドアを開けた。なんだかとても辛そうな様子で、表情にも生気が無かった。それからすぐに彼女は『今日はもう疲れたから』と言って食事もとらないで自分の部屋へと戻って床に就いた。私は彼女を引き留めもせずただそれに『うん』みたいな生返事をしたばかりだった。

思い返せばあの時、私の目は確かに青空の顔に差していた疲れに紛れさせた翳を捉えていた。けれど、それに気付いていたのに私は額面通りに受け取って自分を安心させたのだった。だから、これは私自身にとつても他人事ではなかった。これは青空と私の問題だった。

その翌日のことは数ヶ月が経った今でもつい昨日のことに鮮明に思い出せる。空に白灰色の雲が薄く伸びていたのを覚えている。ひどく冷たい朝だった。

目を開くと青空の瞳が顔だけを動かしてこちらを覗き込んでいた。時刻はたしか八時を回っていたと思う。普段ならとつくに着替えを終えている頃合いだというのに、彼女は寝間着のまま枕元に座っていた。寄る瀬も無くさまよっている彼女の視線から私は何かが妙であると直感的に察した。

「おはよう、青空。どうしたの？」

返事は無く、代わりに青空は射抜かれたように肩を震わせて歪んだ顔で私を見た。まるで飛べずに路傍にうずくまる一羽の鳥のような、ひどく怯えた目をしていた。何か良くないことが起こった。寝ぼけた頭でもそれだけは即座に理解できた。

「…青空、どうしたの？」

また、返事は無かった。しんとした空気が肌を刺す。当時はまだ冬の最中だったというのに、全身からどろりとした汗が湧き出てきた。青空は数十秒ぐらい逡巡する様子を見せた後で、手の中からボールペンシルで殴り書きされた潰れた紙の欠片を出した。そこには震えた字で何度も書き直された、『声が出ない』という一言だけが書かれていた。

それから飛び出るように近隣の病院へと連れて行つたが何度確かめてもどこにも異常は無かった。しかし、青空が嘘を吐いているとは到底思えなかった。何が起こっているのか理解できずに戸惑っている、医師が『専門外のことなので診断書は書けません』と前置きしてから分厚い本を棚から出してある病気に関する頁を開いた。

『場面緘黙症』。あるいは『失声症』とも言われる。失声症という字のごとく如く、言葉が発せなくなってしまう病気なのだそうだ。医師が言うには青空はそういう名称の病気になってしまった可能性が高いらしい。発声器官自体に問題は無いが、内外からのストレスによる精神的なダメージを受けたことで彼女は一時的に声を出すことができなくなっているとのことだった。

場面緘黙は自らの精神の状態が原因となつて引き起こるものであり、『一時的に』という曖昧な言葉を用いたのはそのためだという。それ故にいつまでに治ると断定的な言葉を用いれず、大抵の場合は数ヶ月以内には治まるが、中には原因となつた事柄を解決した途端に治つたという例もあれば、年単位での治療を要した例もあり、治療の期間は患者ごとに大きく異なる。青空の場合は会話も難しいということから、かなり重い程度のものだと思われ、根気強い治療が求められる。

医師からはそう説明された。その間、青空は終始俯いて自分の手の甲を見つめていた。通常の病院では何もできないそうなので、その日は心療内科への紹介状も書いてもらつて家に帰つた。

しかし、そこへは一度行つたきりでそれ以降一度も受診していない。最初の頃こそ病院に通うように彼女に説得を試みたものの、本人の強い要望によりそれは叶うことは無かつた。彼女は今の生活のまま大学にも通いながら治療していくことを望んでいた。治療費などで負担をかけたくないということもあつたが、青空が幼い頃に父親に精神科に連れて行かれた時の経験から、彼女自身がそういった場所にあまり良い印象を抱いていないということが大きかつた。そういった理由から現在の生活をする事になつた。こういったものは本人が望む形の方が良いのだろうし、それに、青空が病院ではなくてここを選んでくれたことが私を頼つてくれているように思えてしまつて、ほんのわずか

に嬉しくもあつたのだ。

「いったいどれだけ待てばこの病気は治るのだろうか。本当に青空をこんな状態で大  
学に通わせてもいいのだろうか。不安の種はいくらでもあるけれど、彼女は私を選んで  
くれたのだ。こんな私だけでも、出来うる限り彼女の支えになろう。寝静まった部屋  
で一人、そう心に決めたのだった。

それから三ヶ月近くが経った。私なりに色々と手を調べては試しているものの、事態  
は一向に好転の兆しを見せてくれない。それどころかその表情は日に日に暗くなつて  
いるようにすら見える。なるべく同じ講義を取るようにして彼女が一人にならないよ  
うに気を配つていても、学科が違うのでどうしても離れざるをえない時はあるし、何よ  
りも本人がそれを望んでいなかった。それでもやはり気が気でなくて、どうにも落ち着  
かない。

「有理奈、これでもう六回目のため息だよ。そんなにため息ばかり吐いていると、幸せが  
逃げて行つちやうよ」

向かいの席に座る結花が箸で空を切る。結花は他学部にも所属する同級生で、心理学を  
学んでいるということもあつて最近は特に行動を共にすることが多い。青空の事情に  
ついて一番最初に相談したのも彼女で、私が青空の傍にいられない時は彼女に代わりを  
頼むこともある。しかし、それは青空の気持ちに反することでもあるため、あまり良い



返事は得られない。

「そうは言つてもね。こういうものは意識して出すものじゃなくて、勝手に出るものなんだよ」

「それならさ、趣味とか好きなこととか、そういうものは無いの？何か気を紛らわせられることは」

「そういうものはもう何も無いかな。昔はあつただけけれど」

「とにかくね、溜め込んでばかりいないでたまには息抜きをすることも大切だよ。どんなことだっていいからさ」

また『そうは言つてもね…』という言葉が口から出そうになつてすりガラスみたいなのプラスチック製のコップを一口煽つた。この時期の食堂の窓際はいつも少しだけ肌寒い。それ故にたいいていは空席ばかりで喧騒を避けるにはちやうど良い場所となつてい

る。

「そうだ。夏休みになつたら私と有理奈と藤崎さんの三人で旅行に行こうよ。自動車免許も取れたことだし、どこか遠くの方まで行つてみたいと思つているの。どうかな？」

「まあ、その頃までに状況が落ち着いていたら、ね」

夏休み、か。喉の奥でその単語を反芻しながら考える。その頃にはどうなつてい

ろう。今年中にはこの生活も終わるのだろうか。そうでなければ、来年はどうなるのだ

ろう。そもそも、青空はどうしてこうなってしまったのだろうか。それは私にどうこうできるようなものなのだろうか。

自分の手を見つめてみる。細長い指々の先端は水仕事のせいで荒れ、所々に赤切れができています。あの頃とは何もかもが違う手だ。大きさも、その形も。伸ばした先にある景色までも。

「言ったそばからまたため息。そんなに私といるのが楽しくないの？」

「ああ、ごめん。気が付かなかつたよ」

「まったく。私は藤崎さんより有理奈の方が心配だよ」

結花の二本の箸が私の方を向く。それで初めて自分がまたため息をこぼしていたことに気がついた。もしかして青空の前でもこんな風になっていたのだろうか。結花の話をも真に受けた訳ではないが、なんだか本当に幸せが逃げているような気がした。

「…日を追うことに痛感するんだ。自分の浅はかさとか、至らなさとか、そういうものを。私にできることなんて何もありませんじゃないか、って。そんな気になるよ」

「間違っではないよ。有理奈にできることなんて何も無い。これは藤崎さん一人の問題であって、有理奈にどうこうできることではないの。有理奈一人がどれだけ努力したところで、事態は何も解決しないよ」

思わず顔を上げて結花の目を見た。その様子には怒ったり苛立ったりしているよう

な気色はどこにも無く、普段と全く変わらない表情をしながらいつも通りの声の調子で  
そう言い放った。それが余計に冷水を浴びせられたような気にさせた。結花はコツプ  
に口をつけてから教え諭すような声色になって続けた。

「でもね。有理奈が楽しそうにしている時の藤崎さんってね、すごく優しい顔をしてい  
るんだよ。だからほら、もつと笑って。最近の有理奈は、その、何と云うのか、とても  
息苦しそうだよ」

「笑えと言われたって…急にはできないよ」

「大丈夫。できるよ。別に笑顔にならなくてもいいの。例えばどこかへ遊びに行く  
とか、それくらいのことでもいいんだよ。ただ一時でも現実のことを考えない時間を作れ  
ばいいの。そうすればきっと、少しくらいは気が楽になるよ」

「気持ちがありがたいのだけれど、そんなことをしている時間なんて無いよ。今日だつ  
て帰ったら夕食を作らないといけないし、それに、そういうのは私だけが楽をしている  
みたいで青空に悪いよ」

「それならこういうのはどうか。歩いて帰れるくらいの距離でいいから、景色の良い  
場所にも行ってみるんだよ。それだけでも気分転換にはなるだろうし、それくらいな  
らいいでしょう?」

そう言つて結花は口の端を指で吊り上げてみせた。胸の奥から濃い黒色をしたもや

が立ち上る。私だって、彼女のように生きられたのなら。彼女のように強くなれたのなら。そう彼女を妬まずにはいられなかつた自分を侮蔑した。私は今、きつとひどい顔をしているのだろう。自分の表情を見られないように冷えた水を一息に飲み干すと胸の辺りがきゅつと締めつけられた。

ちようどその時、窓辺からこん、こん、とガラスを叩く音がした。青空が顔を見せると同時に私達はまるで言い合わせたかのように同時に口を噤んだ。こちらの会話は聞こえてなどいないと分かっている、どうしても罪悪感が少しばかり胸をつついた。

次の瞬間には自然と話題は講義の内容に移っていて、青空が隣の席に座る頃には再び今年の夏休みの予定について話していた。

帰り道、少し寄り道をしてあえて普段降りる駅を見逃して一つ先まで向かってみた。先程の結花の話を聞いてのことだった。いつもなら青空のことに後ろ髪を引かれるものだが今日ばかりはそういう気が薄れていた。それでも拭い去ることはできず、毎日見る駅の看板が視界の端へと流れていくのを見るとそこはかかない後ろめたさを感じた。電車はじきに西へと傾いていく穏やかな日差しを受けて川を渡っていく。知らない団地を通り過ぎていく。この瞬間も連続と続いている会ったことも無い人々の生活の中を、電車はその一部として走っていく。それに乗る私も、そうなれているのだろうか。

『次は明?寺。明?寺。お出口は左側です』

四、五分程してからアナウンスが流れた。駅名の読みは『めいけいじ』という。初めて路線図でこの駅名を見た時はどう読めばいいのか分からず、『みょうどうじ』などを読んでしまつて駅員に笑われたものだった。明？寺という駅名の通りこの近辺には寺があつて、私の記憶が正しければそこにはたしか綺麗な庭園があつたはずだった。というのも、この駅には片手で数えられる程度しか降りたことが無いのでこの辺りの地理には明るくないのだ。これはどこにだつて言えることではあるが、自分の住む町から一步でも出てしまえばたちまち慣れない土地に様変わりしてしまう。私は私の知っている所しか知らないのだ。そういうものなのかもしれない。

駅舎の外に出ると誰かに呼び止められた気がした。寄り道をしようと思つたのはふと思ひ立つてのことだし、この駅で降りたのも単なる思いつきだ。ただの勘違いだろうと周りを見渡しても私の他には誰もいなかった。そもそもこの時間帯もあつてこちらのホームから降りた乗客は私を除けば誰も見ていなかったはずだった。

「こんな所で会うなんて奇遇だね、なんてね。駅に入っていく有理奈が見えたから、ついて来ちゃつた」

声の主は結花だった。日だまりの色をしたスカートも桜色のカーディガンもそのまま、装いは先程と変わっていないかつた。わざわざ逆の方角に向かう電車に乗つてまで私の後を追つていたらしかつた。それ程までに心配をかけていたのかと反省すると同

時に、これだけ私のことを心配してくれている人がいるのだと思うとなんだか胸がこそばゆくなった。

「なんだ、結花か。まったく、ずいぶんと回りくどいことを。ずっと見ていたのなら声をかけてくれればよかったのに」

「それだと有罪がちゃんと言いつけを守っているのか確認できないじゃない」

「もう、人が悪いんだから。でも…まあ、満更でもないかな。身を案じてくれる人がいるっていうのは」

柄にも無いようなことを口に出すと結花は照れくさそうに頬を綻ばせて両手を後ろに回した。ただ単に彼女が心理学の道に通じている身だからというだけでなく、こういった人柄もまた彼女に青空の事情を話した要因の一つとなったのだろう。

「それにしても、ここはどこなの？この辺りで降りたことが無いからよく分からないな」「この駅名にもなっている明？寺にはね、庭園があるんだ。そこを少し回って、後は買物でもして帰ろうかなって考えていたんだ。駄目かな？」

「良いと思うよ。こういうのは行うこと自体に意義があるから、本人にとって気晴らしになるのならそれでいいんだよ。それに適度な運動をするっていうのは心にも体にも良いしね」

そう言って微笑む結花の声か、視界の隅に映った開きかけの桜の蕾か、何かが私の中

に残る欠片とも言い難いような小さな記憶の断片を思い起こさせた。今まで思い出しもしなかった、もうそれがいつのことだったかすらも分からないような遠い昔の思い出だった。

小学校からの帰り道の途中だったと思う。傷の多い黒のランドセルを背負っている私が、池の縁のコンクリートにしゃがみ込んでいる。見つめていたのは、風によつてそこまで流されてきた一匹の鮎の死体だった。その近くには濁った水が放つそれだけではない、私の嫌いな匂いが漂っていた。それなのに私がそこから離れなかったのは、身じろぎもせず水面に浮かぶそれが私にとって初めて目にするものだったからだ。ただ漠然とした恐ろしさと奇妙な安らぎを胸に覚えながら当時の私はそれを食い入るように眺めていた。私か鮎か、そのどちらかが笑っていた。そうしているとそこに桜の花びらが落ちてきて鮎の腹に被さった。死体は波紋の一つも起こさずに標本箱の中の蝶みために静止していた。それを見届けると私は曲げていた膝をまっすぐに伸ばしたのだった。それだけだ。それ以上の続きは無い。なぜ今になってこんなことを思い出したのか、自分でもよく分からない。ただ、今の私では完全にはその時の気持ちを汲み取れることはきつとできないだろう。

「有理奈、どうかしたの？一人の方がよかったなら席を外そうか？」

「いや、そういうことじゃないんだ。ちよつと、そう、考え事をしていただけ。青空のこ

とじゃないよ」

「誤解しないで。私は別に、藤崎さんのことが悪いって言っている訳じゃなくてね……」  
「大丈夫。分かっているよ……分かっているから」

踏切の前で立ち止まる。警報機の出す甲高い音が規則的に鳴り響いている。通り過ぎた電車が煽られた背の高い草達がさらさらと音を立てる。それらの音の一つ一つがひどく騒がしかった。それからすぐに全ての車両が過ぎていき、風が静寂と入れ替わった。そして軋んだ音を立てながら遮断機は静かに元に戻っていった。

明？ 寺は駅からそう遠くない場所にあった。ここへは越して間も無い頃に一度来たきりで道も覚えていなかったの、ここに至るまでに結構な遠回りをしてしまった。あの時は桃色の花びらが石畳を隙間待て彩っていたものだったが、今はまだ蕾の下で眠っているようだった。桜の頃には早すぎたらしい。庭園を巡るどの草木も冬の眠りが明けたばかりであるか、あるいは未だにまどろんでいる様子だった。

「見頃にはまだ早かったみたいだね。有理奈の住んでいた所だったらどれも綺麗に咲いていただろうに」

「私は、こういう飾り気の無い方が好きだな。皆が皆綺麗だったら、目まぐるしくて落ち着かないもの」

まだ青いままの枝々を見上げる。私の生まれ故郷ではどうだったろうか。ここに来



てから一度も戻っていない土地のことなど、私の中ではもはや過去の記憶と殆ど同義だった。

「ねえ、有理奈の地元ってどんな所だったの？私、ここから出たことが無いから、一度聞いてみたかったんだ」

まるで誰かが蛇口を捻ったみたいにきゅつと言葉の流れが止まった。この手の質問は何度もされてきたからもう慣れているつもりだったのに。結花の表情に狼狽の色がうつすらと滲み出る。それがこちらにも伝播して急かされるような思いに駆られる。それなのに口がうまく回ってくれなくて、余計に焦燥が募っていく。それらが不自然なくらいに僅かな間に起こって、『何も無かった』という言葉に帰結した。

「…そっか。ごめんね。嫌なことを訊いちやって」

「私の方こそ、変な空気にしちやった。気を悪くしたならごめんね」

「やめて。謝らないで。有理奈は悪くないんだよ。有理奈は何も悪くないの…私、そろそろ帰るよ。邪魔しちやって悪かったね」

結花は怪物か何かから逃げるみたいに踵を返して石段を降りようとした。いったいどうしてなのだろう。今まで会った人達は皆ああ答えておけばそれでどうにかなったのに、どうしてこう失敗したくない時ばかり上手く行かなくなるのだろう。

「待ってよ結花。私のことなら平気だから…」

「違うよ。有理奈と一緒にいるとね、自分のことが嫌いになりそうで、耐えられないの。だから、今は、どうか一人にさせて」

結花の瞳が木漏れ日に反射して煌めく。私は彼女の背中が遠ざかっていくのをただその場に立ち尽くして見つめることしかできなかった。私がもう少しだけ器用に生きられたのならば、誰も傷つかないで済むのだろう。どうして私はこうなのだろう。手放したいものはみんなこの手に残り、変わってほしくないものばかりが掬い取った海水のように零れ落ちてしまう。そしてわずかに残った一滴すらも最後には緩やかな苦痛だけを残して蒸発していく。だから、この手にはいらぬものばかりが累々と積もっている。私の掌には、毒のような塩の城がそびえ立っている。できることならばこのままどこかに消えてしまつて、誰からも忘れ去られてしまいたい。そんな気分だった。

結花と別れてから買い物をするのも忘れてすぐに電車に乗った。行きと同じはずの窓からの景色にはもう何も思うものは無かった。人目を避けるように駅前の通りを出て路地裏を歩いていると、ふと春の匂いが鼻腔の奥をくすぐって足が止まった。色んな花の匂いが混じったようなどこか胸をざわつかせる香りだった。きつと手前の公園から香ってきたのだろう、生垣の沈丁花の蕾が全て顔を見せていた。まだ幾分か先のことだろうと思っていたが、季節はもう冬から春へと移ろうとしているらしい。

「どうぞ。先日妻と山菜を取りに行ったので、お裾分けを持って来ました」

「これはどうも。もうそんな時期ですか。私の方もそろそろ、山登りの準備をしましうかね」

「やつぱり、今年もまた登られますか。よくまあ、あんなに高い山に登ろうと思うものですね」

「ええ、まあ。毎年やっていることですから」

二軒くらい後ろの庭先から聞こえてきたそんな会話につられて遠くに望む真つ白山々を見上げる。この町の中のどんな建物でも隠せない、雲に紛れもせずにはそびえる雄大な山脈だ。私がこの町の土を踏んで最初に目に入ったものもやはりこの山脈であり、私の中ではこの象徴として遥かに存在している。この町の西側をぐるりと覆うこの峰々の頂は一年を通して常に白く染まっており、そこには季節というものは存在しない。以前住んでいた町では見たことの無い光景だった。

『万年雪と言いましたね。あそこには年中ずつと雪の積もっている場所があるんですよ』

駅から不動産屋へと向かう道中、タクシーの運転手がそう教えてくれたのを今でも覚えていて。かれこれ四年近く前のことになる。この世界には見上げるくらいに巨大な物があることも、万年雪という言葉があることも、ここで初めて知ったことだった。ここにはあの場所には無かった私の知らない日常がある。そう思わされた出来事だった。

けれど、新たなる土地を目指して向かった先にあったのは別の景色の中で行われていくほとんど変わらない営みと、少しも変わらない自分自身だけだった。高校生活では誰の目も気にしないでいられるという仮初の自由があり、他人から羨ましがられるようなものではなかったにせよ人並みな日々を送れてはいたと思う。その一方で傍らにはいつも泡沫のような孤独が付きまとい、私の心象風景からあの家が見えなくなることは無かった。空っぽな充足感のどこかで私は心の内を明かせる誰かを求めていた。

『いる』：なのかな』

誰に向けてともなく言の葉を浮かべて流す。青空にとつて私がそうであるのと、そう言い切ることはできない。万年雪の上を掠めていった風もその答えを教えてはくれず、どこか別の誰かの元へと去っていった。

五時限目が終わって帰ろうとしていた頃、結花から着信があった。こちらが今校内にいることを伝えると、彼女は食堂のいつもの席で落ち合おう返答した。どうやら青空には聞かれない話があるらしかった。内容を訊ねも『電話では話せない』、『直接会って話したい』の繰り返しで、普段よりも語調が真剣味を帯びていた。都合良く青空は先に帰っていた。青空に帰りが遅れるかもしれないという旨のメールを送ってから、私は硬いコンクリートを踏みながら食堂へと向かった。

食堂の中は昼食時と違ってがらんとしていた。少し前まで埋まっていた席はほとんど空いていて、今は数人ばかりの学生が本を読んだり集まって暇そうにしているだけだった。夕飯にはまだ早いこの時間からしてそれは当然のことではあった。けれど、私の中ではそれが余計に事の深刻さを画していた。

食堂の一角にほとんど並行に射す木漏れ日が赤みを帯び始めた窓際、いつもの席に彼女の姿を認めて自分のものじゃないような足を動かして歩きます。結花の座っているテーブルにはアイスコーヒーが一つ、密かにどどめ色の露を浮かばせて待っていた。

「お待たせ。その、昨日はごめんね。私のせいで嫌な思いをさせちゃったよね」

「もう終わった話はよして。昨日のことを蒸し返したくてわざわざこんな時間に呼び出した訳じゃないよ。私が話したかったのは、藤崎さんについてのことなの」

「…場所を変えようか。二人きりになれる場所に。ここだと、話づらいこともあるだろうから」

結花の言葉を遮るみたいに、まるで拒むみたいに言葉の端に力がこもった。本当はこの話を先送りしたいが為のほとんど言い訳のようなものだった。それは暗に青空の事情を他者の目から隠したがっていることの裏打ちであり、そのことに対する後ろめたさや嫌悪感が私をそうさせるのだった。結花は残っていたコーヒーを一息に飲み干して返事とし、隣の椅子にかけた鞆を取った。

建物の裏手に回り、結花が『ここにしよう』と言うまで私達は頑として何も話そうとしなかった。何と無しに、ただそうしなければならぬ気がしていた。結花は小さく息を吐いて一回り視線を巡らせると、小さく息を吸って眼差しを新たにしたら。

「手短に言うね。私に、藤崎さんのリハビリテーションを、治療の手伝いをさせてほしいの」

結花はこれまで見たことも無いような神妙な面持ちでそう切り出した。結花には誰よりも先に青空の事情を話した。だから、もちろん青空の抱えている病気のことには私よりもずっと知っている。彼女の所属する学部のことを加味すれば尚更だろう。そして、彼女がそういった行為に対して決して良い思いを抱いていないこともまた、当然知っている。その上で彼女はそう言ったのだった。

「昨日の一件で決心がついたよ。私は、何もできないまままでいたくない。『何もできなかったから』っていう言い訳で逃げ出したことをうやむやにしたいくない。だからお願い。私に自分と向き合うチャンスをちょうだい」

「えつとね…私個人としてはすごくありがたいけれど、そういうことは、私じゃなくて当事者である青空に言うべきだと思う。こういう大事なことは、部外者の一存なんかで簡単に決められるものじゃないよ。それに、きつと青空は断るんじゃないかな」

結花もそんなことくらい百も承知だったと思う。それを踏まえた上でのこの申し出

なのだろうが、野暮でもいいから何かを口にするこゝでできる限り返答を先送りにした  
い、というのが本心だった。このままでは良くないことくらい分かっている。けれど、  
歪ながらも形作られたこの現状を乱して本当にいいものなのか、私にそれを判断するこ  
とはできなかつた。

「私もきつとそうなると思う。でもさ、藤崎さんのことだから私が直接頼んだらきつと  
嫌だと思つていても承諾しちゃうでしょう？それだと余計に辛くなる一方で本人にも  
良くないから、有理奈にはそれとなく藤崎さんの意向を確認してほしいの」

『これは、藤崎さんが心を許している有理奈にしかできないことなの。残念だけど、私  
じゃなくて』そう続けた彼女の瞳には辛さや苦しみの上に築かれた確固たる強い意志が  
しつかりと宿つていた。私も彼女のように生きられたなら、やはりまた、そう思つてし  
まつた。

「…分かつた。青空ならもう家にいるはずだから、帰つたら相談してみる」

結花は安堵の息をこぼした。私の肺からは後悔の残滓とも一片の解放感とも分から  
ない重たい空気が流れ出た。否定的な言葉を並べていたけれども薄々行き詰まりのよ  
うなものを感じていたのもまた事実だった。やはり、素人だけではどうしようもできな  
い。そういう考えが今日まで何度も思考を掠めていき、私はそれをかき消そうとしてき  
た。だから、遅かれ早かれいつかはこうなる日が来るのは必定だったのかもしれない。

ただ、いつもそれが今日だとは思ってこなかったのだった。

紫がかった夕空を無心で眺めながら靴を揃えていると、焼き魚の香ばしい匂いが漂ってきた。いつもはそんなことをしようとしてもしないのに郵便受けを漁ってみる。なるべく『いつも通り』を演じようとしても、どうにも緊張はほぐれようとはしてくれなかった。鍵をかけてドアチェーンを下ろす。奥の方で食器を揃える音がしてから、とんと青空の足音が近づいてきた。

「ただいま。遅れてごめんね。ちよつと、図書館で調べ物をしていたらこんな時間になっちゃって」

『お帰りなさい。ちようどご飯ができた所だけど、どうする？先にお風呂に入る？』

「先にいただくよ。今日は焼き魚と…何の匂いだろう」

『鯛の塩焼きとたけのこの炊き込みご飯。たまたま安くなっていたから、たまには奮発してみようかなって。小ぶりだけど味はちゃんと鯛だよ。』

「へえ。鯛なんていつぶりだろう。楽しみだな」

どうにも言い出せなくて歯が欠けた歯車のような会話が続く。他愛の無い言葉の一つ一つにこの薄氷のような均衡までも奪われてしまわないかと怯えてしまう。それでも季節は春へと移り、やがては雪も溶け去ってしまうだろう。この世界にあるどんなものだって、いつまでも変わらずにはいられないのだ。



「あのさ、青空。相談したいことがあるんだけど、いいかな？真剣な話だから、食事の後にもゆつくりと」

青空もそれまでの私の様子から感じ取っていたようで彼女の首は重々しく、それでいてそれを悟られないように軽々しく縦に一度傾いた。いつまでも食卓に着かなければいいのに。その思いが足取りまでも重くしていく。ダイニングルームまでの短い廊下を歩く視界が昨日や一昨日よりもずつとゆつくりと動いている気がした。

食事中、まるでそうすることを禁じられたみたいに私達はずつと押し黙っていた。もとより会話というものは無かったのだけれど、そう言い表すしかなかった。分針の腰はひたすらに重く、耳を澄ませば相手の心臓の拍動さえも聴こえてくるような気がした。鯛やたけのこはほとんど味も分からずに喉を通っていった。

「ごちそうさまでした。お皿、私が洗っておくよ」

卓上の食器をまとめて立ち上がりとうすると青空の手がセーターの袖口を掴んでそれを制した。それがもう先送りする『先』が無いことを意味していると、暗黙の内には了解していた。彼女の前に居直つて腰を据える。とうとう腹を据えなければならぬ時が来たのだ。

テーブルの上を転がる箸と壁にかけて時計の針だけがこの部屋の中で動いていた。心臓から流れ出る血潮がどろりとしたものに変わっていく。青空のその双眸が構えら

れた弓のようにじっと私を捉えて『逃げないで』と言っているような気がした。

「…ねえ、青空。青空はさ、やっぱりまだ病院は苦手？」

私が話したのを合図に青空の手が離れる。秒針の音が十五、六回ばかり歩を進めてから彼女はゆっくりと頷いた。彼女は紙に手を伸ばそうとはせず、それ以外の返答は無かった。テーブルの下で一度、両手を強く握り直す。二、三度目を瞬かせてから私は本題に移ることにした。

「今日、帰りが遅れたのはね、本当は結花から相談を受けていたからなんだ」

結花からは遠回しに彼女の意思を聞いてきてほしいと言われていたけれど、私は言われた通りに話すつもりだった。この場において隠し事のようなことなどできようの無いことに思えた。

「結花が、その、病気を治す手伝いをしたい、って。見知った人が相手だったら、少しは抵抗感を払拭できるんじゃないか、って」

一度ここで言葉を切って、彼女の様子を伺ってみた。予想していた通り、彼女は迷いと困惑に満ちた表情を顔一面に広げて狼狽の色を瞳に湛えていた。今更こんな風に思うのも卑怯だけれど、やはり、こんなことを口にしてしまうべきではなかったのだ。この話は全て初めから私の中で終わらせてしまつて、明日結花に会つたら『やっぱり駄目だったよ』などと言つて無かつたことにする方がこれよりはまだ良い選択だつただろ

う。少なくとも、青空にこんな顔をさせてしまうよりは。

「嫌なら断つてくれて構わないの。本人もそう望んでいるし、私だって青空を苦しめた  
い訳じゃないんだよ」

今更そう言った所でもう全てが手遅れなことくらい分かり切っていた。今日までの  
日常と明日からのそれはきつと違うものになる。なんとか作り上げた仮初の安定は瓦  
解して、その骸の上では全てが同じ表情のまま虚の空いてしまった『あたりまえ』が進  
行するのだ。そして全てがもはや手遅れになった時、私はきつとこの瞬間を思い出して  
恨むのだろう。

『少し、考える時間が欲しい。明日の朝には答えを出すから、それまで待つていてほし  
い』

「…いつでもいいよ。別に明日じゃなくたって」

今すぐにも答えて。彼女の耳にはたぶんそのような聞こえていることだろう。そ  
れでも私はそれ以外に言い方を知らないから、せめて表した通りに伝わるようにと祈り  
ながら愚かしくもその言葉を放り出すより他が無かった。

「とにかく、話はそれだけだよ。すぐに答えを出そうとしなくてもいいから、一度ゆつく  
り考えてみて」

青空は顔を俯けたまま自分の食器を持って台所へ去っていった。ほんのしばらく間

を置いてから彼女の後を追おうと立ち上がった所で食器が割れる甲高い音がした。

落ちたのはガラス製の透明なコップだった。食器を戻して電話台の横に立てかけられたほうきとちり取りを持って向かうと、青空はその場にしゃがみこんで破片を一枚一枚指で摘んで拾い上げていた。

「危ないから下がっていて。後は私がやっておくから」

私の声が届いていない訳が無かった。それなのに、私がもう一度、今度はやや強い口調で同じ台詞を繰り返すまで青空はそうすることを止めようとしなかった。青空は手の代わりに顔を上げ、その瞳でまっすぐにこちらを射た。どうしてそんなことをしているのか、私には分からなかった。どうしてそんな顔で私を見るのか、私には分からなかった。その感情の起伏を見せようとしめない表情からはどこか柘榴の実を想起された。赤々とした表皮の裏で、真紅よりも深い赤がぎちぎちと詰まった柘榴の実だ。地面に落とせばぐじゅりと音を立てそうな柘榴の実だ。

どちらから先にそうしたというのでもなく、それからすぐに何かに追われるように青空は自室に、私はダイニングルームにこもった。私は一連の出来事を結花にメールで伝えてからやるせなさげに再来週が提出期限の課題に手を付けた。時折作業の手を止めて壁に耳を寄せてみても、青空の部屋からは何の物音もしなかった。

「…やっぱり、断っておけばよかったかな」

自分で決めたことなのに、また選ばなかった道のことを考えてしまう。先程の提案に對して青空がどういう決断を下したとしても、それは傷跡を残すものとなる。それで前に進めるのだとすれば、この停滞を抜け出せられるのだとすれば、それもまた必要な犠牲と言えるのだろうか。だけど、考えたくもないけれど、もしもこれが何の意味も成さなかつたとしたら。もしも彼女の傷を深めるのみに終わつたとしたら。私にはどちらの未来も見えてはいなかつた。重たい吐息が虚空へと上つていく。今更ため息を吐いた所でどこにもそれを指摘する者などいなかつた。

自分しかいないはずの部屋に對してただ漠然とした居心地の悪さを感じて、歩調を早めつつ風呂場へ向かつた。背後の扉を一つ挟んだ場所には彼女がいる。脱衣場の隣にある洗面台の鏡には、自分の身体がやけに細くて頼り無さげに映つていた。浴槽のお湯は少しぬるくなつていた。

「まだ、その時じゃなかつたんだ」

自分ではない、誰でもない誰かに向けてそう弁明する。青空と病氣のことについて話したのはたしか一月の末の頃が最後だつた。青空が頼んでそうした訳でも、私が望んでそうした訳でもない。非日常だつたものが日常になるにつれて、私達はこの話題について自ずと忌避するようになっていったのだ。だから、情けの無い話だが私はどうして彼女がこうなつてしまったのか、その理由を未だに知らないでいる。思えば私達は二人と

も、まだ現実を直視する勇氣を持ち合わせていなかったのかもしれない。だから、この話はどちらにとつても早すぎたように思うのだ。

「…分かつているよ。本当はそうじゃないんだ」

では、いつまで待てばよかったのだろう。その時が来れば、私達は自ら向き合えるようになったのだろうか。その答えはもはや自明であったけれど、それもまた『もしも』の話であることを盾にして私はそれを認めることを避けてそれ以上は考えないようにした。

やるせない気持ちを引き連れて湯船から上がり、いそいそと着替えを済ませた。再び鏡の前で目にした自分の姿は先程にも増して弱々しく、そして不甲斐無く見えた。

いつの間にか時間は過ぎていき、課題が終わる頃にはじきに夜半を越えようとしていた。そろそろ寝ようかと思いい台所や廊下の明かり消して回っているとふと足に痛みを感じて立ち止まった。手近の照明を点けて確認すると足の裏にガラスの小片が付いていた。どうやらまだ片付け切れていなかった破片を踏みつけてしまったようだった。見落とすくらい小さなものだったので、幸い怪我は無かった。他にも散らばっているのは危ないので、念の為に台所や廊下一帯をもう一度ほうきで掃除し直してからダイニングに戻って明かりを消した。青空の部屋は既に消灯されていた。それからすぐに布団に入ったけれども今後のことや今までのこと、もしものことなど、様々な思いが駆け巡っ

てうまく寝付けなかった。

体感で半刻ぐらいそうしていると不意に扉の開く音が鼓膜を掠めた。驚きを隠して静かに身を起こす。入口の方に顔を向けると、くつきりとした部屋の輪郭の中に青空の姿が映っていた。その顔までは見えなくとも、ほんのわずかに嚙り泣く声が聴こえていた。

「…泣いているの?」

何があつたのか、などとは訊けるはずも無かつた。その言葉を皮切りに青空は堰が切れたように私の胸に崩れて泣きだした。この生活が始まつて以来、今日まで一度としてこのようなことは無かつた。彼女を取り巻く様々な痛みと、そしてたくさんの私の言葉が彼女をこうなるまで苦しめてしまったのだろう。

「ごめん。気付いてあげられなくて、ごめんね」

彼女のその小さな背中手に手を添える。襟元を強く引つ張られ、耐えられなくなったポタンが音も立てずにちぎれて転がった。ポタンは薄明かりすら無いしんとした夜の中に消えて視界からいなくなつた。胸元にじわりと温かいものが広がる。彼女の身体から離れたそれはすぐに冷たくなつて数センチ幅のしみを残していった。青空の寝間着と布団とが擦れる音が何故だかいやにくつきりと耳に残つた。背中の手を払い除けるように、青空はまるで何かを訴えるような細かい声を必死に振り絞っている。それらの

全てが私の耳を通過するばかりで、その『聲』が届くことは無かった。

「私のせいなんだよね、全部、全部……」

今、誰が泣いているのだろう。この部屋には思いを伝える紙も筆記具も無くて、それを見るための光も無くて、はつきりと分かれた二人の体温、たつたそれだけが何も言わないでそこにいた。こんなにも近くにいるはずなのに、今も確かに触れているはずなのに、私は青空がどんどん離れていくように感じていた。私はそんな彼女を繋ぎ止めるために手にきゅつと力を込めて、自分と彼女の存在を確かめていた。

ひとしきり泣き腫らした後、青空は糸が途切れたみたいにその場で眠りについた。穏やかな寝息だった。青空を寝かせて布団を被せ、私はその端に入って眠った。横目にくっすらとだけ見える彼女の寝顔はまるでこの世界の何もかもから解放されたように安らかだった。

「青空はさ、本当は誰にも心を許してなんかいないんだよね。私にだって。青空自身の意思ではどうにもできない場所で、越えてはいけない境界線を引いているんだ。そんなんでしょう？」

返事の来ないと知つていながら、ずるい問いを投げかける。いったいいつまでこんな暮らしを続けなければならないのだろう。それはもちろん、彼女の病気が治るまでである。そんなことくらい当然分かっている。しかし、だ。青空の病気は一般的なそれとは全く違



う。完治にどれくらいの間がかかるといふのかなんて誰にも分かりはしないのだ。好意的に捉えらるゝればそれは明日の朝にでも喋りだす可能性があるということだけれど、それはつまり、その逆にいつまでもずつとこのままでいる可能性だつて十分にありうるということでもある。私達が学生でいられる今の内はまだいいだろう。これがもしも社会に出てからもずつとこのままであつたとしたら。そうなつてしまつたら彼女はきつと自分自身とその人生を恨み、憎むようになつてしまふだろう。だからこそ、まだ取り返しのつく今の間に元の日常を取り戻さなければならぬのだ。それなのに、最善を尽くそうともがけばもがく程に私達の間にあつたはずのものの脆弱さが浮き彫りになつていく。当事者が一番苦しいことくらい十二分に理解しているけれど、私だつて一人の人間だ。胸の内を曝け出してしまふと、このまま青空と一緒に暮らしていくことは私自身にとつても辛いものがあつた。

「……めんなさい」

心臓がびくりと震えた。青空は今、確かにその言葉にしたのだ。それは私に忘れかけていた彼女の声を思い出させた。彼女がどんな声で私を呼ぶのかを、彼女がどんな風に笑つていたのかを。寝言という形ではあるけれど、ちゃんとした彼女の声を聴いたのは本当に久方ぶりのことだつた。

場面緘黙という事象の出自は精神によつて起因するが故に、本人が無意識下の状態に

あるのならこのように言葉を話してもあるのだという。そう知識として頭に入っているけれど、私にはどうしてもそれが回復の兆候であるように思えてしまつて弾む胸を抑えられなかった。それと並行して、傍らではそれ以上の恐怖を感じていた。かつて好きだったこと、かつて気に入っていた音楽。かつては理解者だった人。世界が広がっていくにつれて小さくなつていくそれらはなんだか物悲しげに見えて、その感覚すらも分からなくなつてしまうことが私にはひどく恐ろしかった。そして、彼女の声もその一つに加えられていたことにすら気が付かないでいたこと。それが嫌で、厭で、悲しくて、哀しかった。

「ねえ…青空。私、不安なんだよ。色んなことが。私達のこと。青空もそうなの？」  
穏かな寝息を立てる彼女の髪をそつと撫でる。滑らかなその髪は私の指の間を潜り抜けて流れていった。今度は何も応えてはくれなかった。いつの間に降りだしたのだろうか、外からは雨音が聴こえていた。

土曜日の午後は久しぶりに一人で過ごした。青空は昼食を食べた後、すぐに大学のあの駅の数駅向こうにある結花の住むマンションへ向かつており、部屋は普段のそれとは似て非なる静けさに包まれていた。色々な事情を加味しておそらくは断るものだと考えていただけに、青空が通うと選択したことはかなり意外だった。

青空はあの日の翌朝、朝食の場で結花の申し出を受ける旨を私に伝えた。二人とも一

時限目に講義は申し込んでいなかったので互いに時間があつた。青空はきつとそれを見計らつて私にそう打ち明けたのだった。

『私も、前々からこのままではいけないっていう思いはあつたの。結花からの提案が無かつたとしても、たぶん近い内にそういう話になつていたと思う。それが皆の為でもあるし、何よりも、私自身の為でもあるから。だから、この病気を治す為ならでできることは全てするつもりなの。いつまでも皆の厚意に甘えているばかりではいけないから。』

その時の青空の瞳は食堂の裏手で見た結花のそれとよく似ていた。あの眼差しを向けられると途端に胸が窮屈になつて、やり場の無い息苦しさに襲われる。その理由は分かっている。それが懸命に前へ進もうとする者の目だからだ。それが私には無いものだからだ。

「そうなんだ。でも、無理だけはしないで。それだけは約束してね」

青空は不出来な添水みたいにかぶりを振つた。この言葉は半ば私の悪足掻きのようなものだった。彼女がそう決めたのなら、それはいいことなのだ。彼女が踏み出した一歩を認めたいのにそれを邪魔する疎外感に似た何かを私は心の隅に追いやつて、冷たい水で流し込んだ。四日前の出来事だった。

それから二人の間で話し合いが行われ、金曜日の夕方、もしくは毎週末の昼頃に小一

時間程度、内容としては発声の練習やカウセンシング等を中心に行われることが決まった。そして、その際に私のような第三者はできる限り傍にいない方が好ましいということだったので、場所はここから離れている結花の部屋が選ばれた。その日の夕方に青空から、それからすぐに結花からもそういう話があった。

その初回が今日なのだった。終わり次第結花から連絡が来る手筈になっており、その間はずっと一人になる。もう終わってしまった鶏肉の仕込みの他にやるべきことも見つからなくて、漂うようにテレビの前に座った。たしか以前はこうしていた。一年と少し前までは一人でここに暮らしていたはずなのに青空がいなくなつたこの空間はまるで借り物のようで、単に彼女がいらないだけの時とは何かが違っていた。四年前に高校に近いからと無理に借りたこの部屋は二人では狭く、一人ではあまりにも広すぎた。

青空と再会するよりも前、一人暮らしをしていたあの頃は毎日がこうだった。話す相手も無く、話すようなことも無く、耳に入るのは生活音とテレビから聴こえてくる声ばかりだった。ともすれば今よりもずっと音の無い生活だったのかもしれない。下宿をしている者が物珍しいのか時たま当時のクラスメイトがここに來ることもあつたけれど、それもせいぜい片手に収まる程度の回数だった。孤独な夜を重ねる毎に彼女への未練とあの場所を出て行ってしまったことへの後悔が強まっていつて、その度に『これだよかつたのか』と『これでよかつたのだ』がぐるぐると円を描いた。

私の思い出していた青空の姿は最後に会った時のままでずっと止まっていただけに、三年ぶりに会った彼女の些細な変化にさえ驚いた。まるで錆びて合わなくなってしまう鍵のように、彼女はあの頃の面影を残したまま、やはり線の中の一点にはなれないでいた。例え流れる川は変わらずとも、そこに同じ水が帰ることなどありはしなかったのだった。

「あの……もしかして、杉本さん、ですか？」

あの日、最初に話しかけてきたのは青空の方だった。掲示板を取り囲むざわめきと歓声を背に受けながら、自分の番号があることを確認して踵を返した私に彼女はそう話しかけてきた。振り返るまでも無く青空の声であることは分かっていた。いやに遠慮がちな声だったけれど、この誰も私のことを知らない町の、誰も私のことを知らない人混みの中で私の名前を呼ぶその声はまるで遠雷のように鮮明に聞こえた。

「やっぱり有理奈だ。久しぶりだね。こつちに引越したって聞いていたから、もしかしたらと思っていたの。元気にしていた？」

「まあ、ぼちぼちな。中学生の時以来だから、かれこれ三年ぶりになるのかな。今ではすっかり一人の生活が板に付いてきたよ」

久しぶりに会った彼女は少し背が高くなっていた。当然ながらも中学校の制服も着ていなかった。そして何よりも、二人の間にある全てがあ頃よりもぎこちなかつ

た。彼女は、そして私自身も、言葉にし難いくらいに小さな所で変わってしまった。守る為ではなくて逃れる為に、本人すらも気付かない内に仮面を被っていたのだった。互いの見ぬ間に、それぞれの場所で。

「そんなことよりも、どうしてここに？あそこにも大学なんて沢山あるのに。それに、ここはずいぶんと遠かったでしょう？」

「それだけが理由ではないけど、国公立の大学の方が学費が安く済むからね。だけど、私の学力だどこも一筋縄ではいかない所ばかりだね。ここはまあ、少しでも可能性を高める為に受けただけなの。残念ながら合格できたのはこのこと、いわゆる滑り止めの学校だけだったみたいだけど」

「そっか。それでも、ここに合格できただけでも十分にすごいよ。傍で見ていた訳ではないけれど、青空はよく頑張ったと思う。もっと自分に自信を持ちなよ」

「そうだよね。うん、ありがとう。それでさ、有理奈の方は、えっと、その…どうだった？」

「ちゃんと合格していたよ。人文学部の文化化学専攻。青空はどの学部を選んだの？」

「よかった、おめでとう。学科は違うけど、私も人文学部なんだ。これで四月からは一緒に通えるんだね」

努めて懐かしがるような素振りはしなかった。そうしてしまおうと、なんだかあの頃の

関係が全て嘘になってしまふような気がしたから。いや、そうであることを認めることになつてしまふから。青空もきつとそうだったのだと思う。続いていく今が過ぎていった日々の延長線上にあると信じ込みたくて、その為に放り出された言葉が寒空の下で空回りしていった。

「私の知り合いは誰もいないから、知っている人がいると気が楽だよ。それで、ここに通うつてことは、やっぱりどこかに部屋を借りるんだよね？」

「うん。流石に家からは通えないからね。お金はかかるけど下宿先を見つけないと。それも兼ねて今日はここまで来たんだよ」

『それならば、私の部屋に一緒に住もうよ』。その言葉を形にする為に、口の中で数度それを転がして、その場限りの仮初の勇気を借りた。そこに別の意図が無かつたとは言いが切れないが、間違い無く彼女の力になりたいという純真な心から出た言葉だった。その一方で、どこかであの夜の約束を指でなぞっている自分も、確かにそこにはいた。

それから青空は何と言つたのだったか。その先はよく覚えていない。私は彼女の返事に対して『これからまた、よろしくね』みたいなことを返し、彼女もまた同じようなことを口にしたはずだ。

そうして引つ越しやら諸々の準備を終えて、彼女との生活が始まつた。それが去年の桜の蕾もまだ開かぬ三月の末のことだった。それから九ヶ月後、青空は誰とも話せなく

なつてしまった。

「もうじき、五ヶ月になるのか」

五ヶ月、というのはもちろん青空が病気になつてから今日までの期間だ。今はまだ、この期間の方がそれ以前よりも数ヶ月ばかり短い。そうであるのに、実の所、私はこうなつてしまうよりも前の青空のことをあまりうまく思い出すことができない。転がつていくみたいに過ぎていくありふれた一日一日の中に、側溝の縁に咲く名前も知らない小さな花のようにただ彼女がいた。彼女がそこにいることに何の疑問も抱こうとしなかつた愚かな私が出た。皮肉なことだけれど、思えばこの生活が始まつて初めて、私は彼女をまつすぐに見つめようとしているのかもしれない。

テレビから流れるノイズを止めて再びこの狭くて広大な海を漂い始める。浜や浅瀬などどこにも無い、底の見えない瓶詰め的大海だ。青空や結花達がいる世界とは隔絶された深い、深い淵だ。

『ごめんなさい』

青空が夢枕に口にしたその言葉の残響が頭蓋から消えようとしな。当分の間、私はまだ結花の部屋を訪ねられそうになかつた。

『今夜のお祭、一緒に行かない？』



やっと冬の寒さがなりを潜めようとしていたある春の日の昼下がりに、珍しく青空から外出に誘ってきた。この地域では田植えが始まる時期になると近所の神社とその周辺でその年の豊穡を願う祭が開催される。神事自体は昼前に終わり、暮れ頃になると境内には色々な出店が並ぶのだ。大規模なものではないけれど地元の人達による手製の花火も打ち上がる。この町のみと言わず、町の外でも中々に知名度のある祭だ。青空が言っているのはその祭のことだった。去年は互いに都合が合わなくて部屋窓から花火を眺めるのがせいぜいであつたため、今年こそはと以前から約束していたのだった。

「もうそんな時期なんだ。いいよ、行こう。今年は特に予定も無いしね」

今年になつてからずっと青空は通学や買い物などの用事以外では一度として外へは出ていなかった。最近になつてそこに結花の住むマンションへの訪問が加わつたことで彼女の心境に何かしらの変化が生じたのだろう。それが良いものであるならば、私も嬉しい。病院へは通わないと決めた以上、青空自身の力で快方へ向かつてくれるのを頼りにするしかないのだ。結局の所、どう取り繕つた所で他者にできるのはせいぜいその手助けだけだ。もちろん私だつて何もしていない訳ではないし、結花も尽力してくれている。けれど、それでも、やはり、自分は他人にはなれないのだ。どれだけ分かつたふりをした所で他者の心の内を覗き込むことなどできるはずが無いのだ。繰り返す『今日』があの日から遠ざかつていくにつれてその考えが水面を走つていく陽光のようにち

らついで、遂には居座るようになってしまった。

「今日は天気も良いし、今年もよく見えるだろうね。境内の桜に花火がよく映えて綺麗なんだ。青空もきつと気に入ると思うよ」

すっかり日陰になってしまった窓辺に目を向ける。空には雲一つ無くて、それに紐付けられたようにあの少しばかり寒くてそれでいて温かみのあるあの柔らかい空気が思ひ出された。たしか、ここに来た年の今日もこんな風によく晴れていた。予報によると明後日の夕方頃まではずっとこの快晴が続いてくれるそうだ。

『去年は行けなかったから、その分今日は楽しもうね。早く夕方にならないかな。』

「そんなに期待されても困るな。なにせそこまで大きな祭ではないから」

私にとってはこれで何度目かのものであるこの祭も、彼女にしてみれば今日でまだ二度目のものになるようだ。傍から見れば当然のことであるその事実がまるで遠い地の出来事でも聞いているかのような他人事めいた感覚で流れ込んできて、私はなんだか自分がこの土地とは違う場所に足を付けているような思いに囚われた。

「そういえばさ、青空の高校生活って、どんな風だったの？ 県立高校に進学したっていうのは聞いていたのだけだ」

できるだけ気にかけていない風に聞こえるように努めて軽い語調で訊ねた。特にそうしていた理由などは無いのだけれど、何となく今まで訊けないでいたことだった。も

しかすると彼女にとってあまり良い思い出ではないかもしれないからと、何か根拠がある訳でもないのに二の足を踏んでいたのだ。それは、無意識の内に私自身の境遇を彼女に重ね、彼女もそうであつてほしいと願つていたからなのかもしれない。それを認めたくなくて私は一層声を明るくして続けた。

「大したことじゃないんだ。私にとつてこの町は三年間の高校生活を過ごした場所なのに、青空からすればまだ慣れない土地なんだな、なんて思つてね。同じだけの時間しか流れていないのに、こうも違うんだなつて」

青空は要領を得ない顔を隠して手元に手帳とシャープペンシルを手繰り寄せた。青空はこの部屋の中でさえ片時も紙と筆記具を手放そうとしない。外出時には手帳に紐を通したものを鞆に結びつけて行動しているくらいだ。どちらも手話は習得していないので、彼女にしてみればこれが携帯電話のメールだけがこの世界と繋がっていられる手段であり、私や結花が普段から何の気兼ねも無く使っているこのただの音の塊も彼女にとつてはそれほど大切なものであるのだ。

『あんまり変わったことは無かつたかな。しいて挙げるとすれば、家事の片手間でできる園芸部に入つていたことくらい。校則でどこかしらへの入部が強制されていたから。有理奈はどうだつた？』

「私はね…私も、そんな感じだつたかな。青空と同じ。普通だつたよ。まあ、勉強してば

かりで部活には入っていなかったけど」

それを聞いて青空はどこか困った顔をした。その薄弱でおずおずとした眼差しにどこか罪悪感のようなものが湧いてきて、『まあ、悪いものではなかったよ』と付け加えた。その瞳には隠しておきたいことの全てが見透かされているのではないかという私の中の恐れが投影されていた。青空は眉を緩やかな八の字に曲げたままに、曖昧に微笑んでまた何かを書きだした。

『有理奈は、友達と一緒に行かなくていいの?』

「ああ、そういうことか。気にしなくていいよ。皆、家から遠いからとか、勉強で忙しいからとかで、誰かと一緒に行ったことなんて一度も無かったから」

青空が藪から蛇を出してしまったような顔をしたので私はまたしてもなんともない風を装って白状した。白状するというよりも、観念するという方が正しかった。私は先程の言葉を撤回する。『悪いものではなかった』ではなくて、『耐えられない程に辛いものではなかった』のだと。

その景色を最初に目にした高校一年生の夜、私は一人で夜空を見上げていた。忙しい日々の中のその一つ、学校からの帰り道で何と無しに眺めた公園の前の掲示板に貼られたちらしを見て、私はそこはかとなない人恋しさを紛らわす為にそれまで一度くらいしか訪れたことの無かった神社へと赴いたのだった。祭の会場の雰囲気はとても新鮮で、どれ

もあの町には無いものばかりだった。境内を賑わせるたくさんの人の顔を私はどこか縁遠いものに思いながらも、そこに漂う温かくて素朴な空気につられて固く張り詰めていた心の糸も自然と緩んでいったのを感じていた。その時に見たあの花火を私はきつと忘れられないだろう。その音は門出への祝福であり、その彩はこれからの展望であった。そして、それを取り巻く全てがこの町そのものであった。

「来年もまた、来よう」

いつかは私もこの喧騒の中の一人になれるのだろうか。心の内から湧いて出た問いかけに対してそう呟いて、祭の音の中に紛れさせた。

その次の年もそうであった。その頃になると生活の不自由も減ってきて、知り合いも幾人かは増えた。けれどその年もまた一人で神社の鳥居をくぐっていた。近所に住んでいるというクラスメイト達を誘いはしたものの、あのようになつまらない場所には行きたくないそうだった。他の人達にとつて、あそこはもうあまり魅力的な場所ではなくなってしまったらしかつた。特別な場所というものはその場所そのものが特別なのではなくて、その人の中で特別になるのだ。それ故に、互いに同じ『特別なもの』を持っている人は貴重だったのだ。遠く離れた土の上で初めてそのことに気がついて、そうして前の年とは少し違う寂しさを抱いてアパートを出た。そんなことがあつたからなのだろうか、下駄や靴が石畳を蹴るその音が、玉砂利を鳴らす子供達の笑い声が、雑踏の

中の一つ一つが、私の輪郭に沿うように私をそこから切り取っているように感じた。私  
は、この町でもまたひとりぼっちになつてしまった。形を持った寂寥感のはつきりとし  
た感傷を伴つて倒れたコップのように瞳の端まで広がつていった。それでもお腹は空  
くものだからと口に入れた大味で妙に甘つたるい焼きそばが塩辛くて、その時ばかりは  
誰の眼も私に向けられたものではないことがありがたかつた。それでも、私は、この町  
で生きていきたい。生きていくのだ。滲んでぼやけて見えた花火とその音にもかき消  
されない歓声の中で一人、そう心に誓つた。

三年生になつてもやはりそれは変わらなかつた。その時分は早く高校から抜け出し  
たいという思いに突き動かされ、本当にそうなる訳でもないのに二年生の初夏の辺りか  
ら周りに先駆けて受験勉強に取り掛かつていた。その甲斐あつてか模擬試験では国公  
立の大学にも手が届くような成績を出せるようになっていて、そのせいで他の生徒から  
は敬遠されるようになった。毎日毎日が虚ろで、どことなく晴れない気分だつた。私を  
そうさせたのは周りが作つた見えない軋轢のせいなのに、私がテストなどで好成绩を残  
せば残すほどにそれはますます大きくなつていつて、私をそのがらんだような逃避行に駆  
り立てた。その日の夜も大した意義も無いままに分厚い参考書に身を忙殺していた。  
祭に行こうと思ひ立つたのは一際明るい最後の数発の花火がちょうどこの窓から覗い  
た頃で、神社へと向かう道程で終了のアナウンスを聴いたのだつた。どうにもそのまま

踵を返してまっすぐ帰る気にはなれなくて、多くの人達が撤収作業や打ち上げに入る様子を横目に宛も無くただその中をぶらついた。喧騒が別のものへと変わり、人の気配が夜に飲まれていく大通りは夜風も相まってほのかに肌寒く、けれどもまだほんのりと人の営みの温もりを残していた。一抹の人恋しさを感じさせるその場所は、胸の内にある不定形の孤独感に何も言わずに寄り添ってくれているような気がして、案外私にとつては居心地の良い所だった。

「やっぱり、私にはこっちの方がお似合いなのかな」

一度そうやって言葉にしてみると、不思議と心は苦しくなくなった。鍵穴にびたりと合う訳ではないけれど、これでもいいかな、と。諦めや妥協とはどこか違う、胸のつかえを残したままありのままの気持ちで受け入れられた。その夜は普段よりもずっと遅く、けれども何の考えや不安にも邪魔されずに深くぐっすりと眠った。

その次の春には私は高校を卒業して大学生となった。高校を出たからといってこれといって何か目に見えるくらいの明白な変化があった訳ではなく、ただ高校にいた頃ははつきりと見えていたものが漠然としたものへと変化しただけだった。とどのつまり、私の胸に居着いたものはこれから先も形を変えていくけれど、その本質はずっと変わらないということだった。しかし、そんな中でもそれまでとは違うこともあった。偶然にも青空と再会して二人で暮らし始めたことだ。単に人が増えたというだけでなく、精神

的な面においても家族とは違う等身大の二人での生活は一人で過ごすそれとは全く異なる何かがあった。そのことに加えて諸々の書類やらレポートやらと大学生活のあれこれもあって去年の春は祭へは行けなかった。せめて気分だけでもとありあわせで作ったお好み焼きを銀紙に包んで、紙コップに注いだ炭酸飲料を並べて真つ暗な部屋から花火を眺めていた。

「綺麗だね。私、本物の花火なんて初めて見たよ」

「あそこにはこういう祭なんて無かったものね」

「……これからは、この町で暮らしていくんだね」

その声はもう仔細には思い出せないが、橙や黄色に照らされたその横顔はまるでここに引つ越したばかりの頃の私を見ているようであり、そして、遠い思い出の続きを見ているようだった。二人なら、今度こそ。まるで耳元で打ち上げられたように花火の音が響く静かな部屋の中で、ついそんなことを考えてしまった。

今でもまだ、その幻想は消え切ってはいない。

祭が始まるのは五時頃からだったのだが、気が急いでしまってその四半刻くらい前に来てしまった。結花にも声をかけようかとも思ったけれど、ここは彼女の住んでいる所からは遠いので急に呼んでしまっては彼女にも迷惑がかかるだろうからと誘うのはやめておいた。



『やっぱり、結花も誘っておけばよかったかな。』

「そうだね。後で結花の耳に入ったら、きつと文句の一つや二つは言われるに違い無いよ」

『来年こそは、ちゃんと三人で行きたいね。』

青空の言葉に頷きながら明確な行く宛も無く辺りをぶらついて暇を潰す。結花を祭に誘わなかったのはもしかすると知らない内に私が怖がっていたからなのかかもしれない。私と結花とは気の置けない関係、友人や親友の間柄だと思っている。だからこそこの祭が、私の中の『特別なもの』が彼女にとつては『つまらないもの』であったとしたら、きつとそれを知る前までと同じではいられない。それならばいつそ知らないままの方が良いのかもしれない、と。

既に屋台のほとんどがのぼりを掲げ始めている石段の下の通りでは祭の始まりを待つ人達の姿がちらほらと散見された。しかし、よく見てみればそのほとんどは祭の運営に関わっている人達かその知り合いばかりで、中には地方誌か何かの取材で写真を撮影している人もいたものの、私達のような人はあまり見られなかった。

「どうも、ご苦労様です。今年も何とか花火を打ち上げられますよ」

「まあ、今年の所はね。職人連中の方では今年でもう引退だの、跡継ぎが見つからないだの、暗い話ばかりですよ。これもいつまで持つことやら」

「まあまあ。祭の夜くらい、そういう話はやめましょうよ。それに花火がなくなっても祭はできる。それでしよう?」

「しかしですな。俺も、俺の親父も、何代も前からずっと見てきた物なんです。俺らでそれを絶やすだなんて、そんなことできませんよ」

「何もここでできた物にこだわらなくたって、どこか違う所からでも花火を持って来ればいい。同じ火花に違いは無いでしょう?」

「それじゃあ駄目なんだ。あなただつて分かっているでしょう。ここで作った物だからこそ、感じられるものがあるんですよ…」

境内へと続く階段の途中、上の方から複数のそんな唖れた声が耳に入ってきた。声の主達は私達の姿を認めると気まずそうに声を潜めたが向こうにとつても私達が先程の会話を聞いていたことは明白であり、つられて私達も目を逸らしてしまった。あの煌びやかな光にも、ちゃんと影はあるのだった。

そんな思いも束の間、祭が始まってしばらくすれば周りはずぐに私の見知った景色へと様変わりした。暗雲は取り払えないけれど、今年もまだ続いてくれている。あのやり取りを聞いた後だと、尚更そのことがありがたく思えてくる。

「お昼ご飯も早かったし、何か買おうかな。青空もそろそろお腹が空いてきた頃じゃない?」

『うん。どのお店が美味しいの?』

「そうだね…あそこの焼きそばは美味しかったかな」

方々から漂う色んな食べ物匂いに惹かれて自ずとそんな話題になった。焼きそばやフランクフルト、りんご飴に少し気の早いかき氷。どれをとつてもここで生まれた物ではないだろう。言うなれば、この祭はよそ者ばかりでできている。それでもやはり、この出来合いの空気もまた私がここが好きになった理由の一つなのだった。

「すみません。焼きそばを二人前、お願いします」

店主から受け取ったパックを青空に渡し、再び境内を歩き回る。春先の過ぎやしやすくなった空気はこの容器越しに伝わってくるやんわりと熱さを感じさせる温もりが心地良い。

「どこか落ち着いて食べられそうな…そうだ、石段の辺りで食べよう」

そう思わせるのはきつと、単にそれだけのことではないのだろう。できることならば、来年も再来年も、何年後もこの温もりを感じていたい。次は結花も誘って。一人じゃなくて、三人で行こう。

『お祭って、楽しいんだね。』

久方ぶりにりんご飴を齧ってみたり、柄にも無く輪投げや射的に興じてみたり。店先を巡る度に青空は手帳の頁を一枚、また一枚とめくった。普段であれば外出先ではあら

かたのことは紙とペンを使わない簡単なやり取りで済ますことが多いので、今日みたい  
に沢山話してくれるのは珍しいことだった。それだけ、その言葉が本心であるとい  
うことだろう。

「青空がそう思ってくれて、よかった」

『私の方こそ、有理奈と一緒に来られてよかったよ。』

青空ははにかんだ顔を隠して石段の隅に腰掛けた。『来年は結花も誘おうね』なんて返そうとして隣を見ると青空が首から提げた手帳に向き合っていたので、その言葉は喉の奥に引つ込めた。日常会話くらいのごく短い文ならば青空も手元を見ずに書いているのだが、長い文章を書こうとするとこのように手元を見なければいけない。私は手持ち無沙汰になってしばらく下の通りを眺めていた。境内と通りの狭間であるこの場所  
は人の往来が絶えず、ここに留まっている者は私達だけしかいなかった。

『私はいつも何かをしてもらってばかりだから、例えばその言葉が嘘だったとしても、少しだけ気が楽になるよ。有理奈にはいつもたくさん苦勞をかけているから、有理奈に何かを返せているのならよかった。もしも有理奈がいてくれなかったら、私はきつとこの街でもひとりぼっちだったから。』

「……そんなの、」

『私だって同じだよ。そう私は言ったのだろうか。その声は無機質な携帯電話の着信

音にかき消された。青空の方にちらりと視線を投げる。彼女は目配せをして境内の方へと離れていった。

鞆から携帯電話を取り出すと無意識に嫌な想像が頭をよぎった。かれこれ二、三年ぶりくらいになる家族からの着信だった。私が実家を出てからというもの、最初の年こそ月に一度くらいは仕送りと共にいつも決まって母からの電話があったものだったが、それもその次の年の梅雨明け頃には途絶えた。それ以降はこちらが用事がある時を除けば一度してこのようなことはなかった。さしずめ私は厄介払いをされた身で、この仕送りは一家の腫れ物との手切れ金ということなのだ。こちらは両親のお金無しには成り立たない身だということも理解してはいるけれど、金銭の面倒さえ見ていれば親らしい顔ができるのかと預金通帳を開く度につく悪態が胸焼けを起こす。

「久しぶり。何があったの?」

まさか『ただ声が聴きたくなつた』とかいう訳ではあるまい。何も無いはずが無いだろう。おそらくは親類の誰かの七回忌であるとか、長寿祝いで親戚一同の集まりがあるだとかそういったことだろう。それでもなければ、あるいは。電話口の向こうから聴こえたのは父の声などではなく、やはり母の声だった。それもそうだろう。例えどのような事情であろうとあの人が自ら電話をかけてくることなどあるはずが無いのだ。

「……………えっ?」

家に帰るとすぐに身支度を整えた。あまりのことに気が動転してしまい、大した説明もしないままに青空を祭の会場に置き去りにして帰ってきてしまった。申し訳の無い思いを押しやってトランクケースに着替えや歯ブラシやらを詰め込む。まだ駅員は駐在しているだろうか。週明けの講義までには結花に大学内での青空の付き添いを頼まなければならぬし、私自身も次週の講義を欠席する旨を連絡しなければならない。それに、アルバイト先にもこのことを伝えて、誰か代わりとなる人を立てなければ。

「まさか、あの家に戻る日が来るとは……」

そんなことを呟きながらテーブルの上に乗まで出かけるという旨の書き置きを残して玄関を出た。乗り換えの特急列車のチケットを買う為だった。どの道明日は始発の電車に乗らなければならないので朝一番に駅で購入すればよい話であって、特段今すぐにしなければならないことではなかった。けれど、今は別のことに気を紛らわせて冷静になる時間が欲しかったのだ。

あえて通ったことの無い道を通ってみたり、わざと遠回りをしたりしたので駅に着くに普段の倍以上の時間がかかった。その頃にはもう空はほとんど黒に近い紺色に染まっっていて、歪な地平線の向こうにわずかに藤色を残すばかりだった。駅舎の前まで行くくと近隣の案内板の隣に立つ小綺麗な掲示板が目に入った。それ自体は特段目新しい物ではない。他の場所にあるような物と何一つ違わない、ただ他よりもやや大きくて念

入りに掃除されているだけの物だった。そんなどこにもあるようなありふれた物を近くで眺めているのもまた、現状を受け入れるのをもうしばらく先延ばししたいが為だった。アクリルのカバーに覆われた内側に地域の句会や絵画教室、図書館での読み聞かせなどのちらしが並ぶ中、特に大々的に宣伝されていたのはやはり今夜の祭だった。掲示板から目を離して出入口付近の時計に目をやると時刻は七時にさしかかろうとしていた。向こうではじきに火花が打ち上がるかという頃合いだった。

「…何をしているんだろう、私」

夜風ですっかり冷えた頭で考える。青空はまだあの神社にいるのだろうか。それとももう部屋に戻っているだろうか。そのどちらにしても、彼女にはひどいことをしてしまった。帰ったらちゃんと謝らなくてはいけない。そう思い直すと先程までは右往左往していた足はまっすぐに家路へと向かっていった。まだ用を済ませてはいないけれど、明日の朝には嫌でもまたここに来るのだ。そんなことなんかよりも今は早く家に帰ることの方が先決であった。

『なんだ。全然変わっていないじゃないか』

今より少し背の低い、中学生の頃の自分がぼやく。ろくな考えも無しに自分勝手に動き、そうして後になってからようやくそれを悔やむ所はあの頃からまるで成長していなかった。

『独りよがりなくせに寂しがり屋で、それなのに自分からは歩み寄ろうとしない。私と全く同じだ』

ああ、そうだ。私はどれだけ歳を重ねてもやっぱり何も変わらない奴なのだ。それは何も違わない。しかし、そうであっても、そこから抜け出そうとすることだけは決して止めてはいけないのだ。変わる努力すらも止めてしまつてはならないのだ。例えその結果が無駄なものに終わつたとしても、そうしたことそのものがいつかきつと意味を持つはずだから。急いた気持ちは歩調となつて、一歩ごとに早くなつていく。今度はアパートまで一番近い道を辿つているはずなのに、さっきの何倍もの時間がかかつているような気がした。

ドアノブに手をかけると部屋の中はそこはかとなく冷たく、そしてしんと静まり返つていた。出る時に閉めたはずの鍵が開いていて、玄関には青空の履いていたスニーカーもあつた。花火の音は少し前から遠くで聴こえ始めていた。

「青空、ごめん」

風呂場や台所を足早に抜けてダイニングに出ると『ただいま』も言わずにそう言った。この『ごめん』は誰に対する、何についてのものだったのか。彼女に対する後悔の念なのか、あるいは過ぎ去つていった日の私への贖罪なのか、おそらくはその両方へのものだったのだろう。彼女はソファアーに腰かけたまま、読んでいた小説に指を挟んで振り



返った。

『何のこと？』

彼女にしてもそうだった。というよりも、誤魔化さずにしつかりと口にしてほしい、という意味だった。机の上には袋に入ったままのりんご飴とたこ焼きの入ったパックが一つずつ、真新しいままで置いてある。私の気のせいなのか、どことなく青空の眉がつり上がっているように見えた。そんな顔もできるのか。そう思った次の時にはいつもの穏やかな表情になっていて、そんなはずは無いだろうに、さっきのは見間違いで今の心境がそう見せたのかと疑ってしまった。

「その、いろいろ。せつかく青空が誘ってくれたのに急に帰っちゃったこととか、青空を置き去りにしちゃったこととか、そういうこと」

『いいよ。仕方の無いことだもの。有理奈の方こそ、これからしばらくは色々大変なことが続くだろうけど、頑張つてね。』

「ありがとう……ごめんね」

『ごめん』というのはいさげな言葉だ。つくづくそう思った。この言葉の言外にはいくらだって意味を潜ませられる。面と向かつては言いづらいことも、答えを聞くのが怖いことだって、その全てをまとめて許された気になってしまえる。それでも尚、この都合の良い言葉を使ってしまう私は、やっぱり卑怯者なのだ。

「気を使わせちゃって、ごめん。私なんかよりも青空の方がずっと辛いのに」

小説から指が離れる。青空は口を真一文字に結んでもう一度顔をしかめて、今度はそれを解かなかった。そこには明らかに抗議の意が示されていた。自分一人で全てをなるとかできるほど、人と人との繋がりは都合良くできてはいないのだ。あたりまえのことですらあるそんなことさえも、私はこの日まで幾度と無く忘れては、また思い出して痛感してきた。今、この瞬間もそうだった。

『そんな風に自分を卑下しないでほしい。人の気持ちに優劣なんて無いんだから、辛い時は辛いでいいんだよ。どちらの方が大事だなんてことは無いの。だから、私のことをかわいそうな人なんかにしないで。今日だって、私は有理奈と一緒にお祭に行けて楽しかったし、全然辛くなかったよ。』

『有理奈にだけは、私をそういう目で見てほしくなかった。』青空はそう続けた後に小さく、『ごめん』と書き加えた。私は返す言葉が見つからなくて、もう一度『ごめん』と言った。こんな時、彼女の冷たい手を握って体温に乗せてこの心の中身まで伝えられたなら。言葉というものはなんて不便で、そして正直なのだろうか。

花火の音が静寂を裂いた。また一つ、もう一つ。もう一つ。どちらも花火など見てはいなかった。彼女の瞳の奥に映るものすらも分かりはしないのに私は目を逸らすこともできないまま、額縁に入れられたようにただ青空の顔を見つめていた。やはり、青空

と私は他人どうしでしかいらなかった。

夢を見た。気が付くと、そこは大きな劇場だった。私はその舞台に近い一席で開幕のブザーと共に幕が上がるのを眺めていた。私の両隣には誰もいなくて、どこを見渡しても座っているのは私だけだった。これから何が始まるのかは知らない。手元には一冊の小冊子のようなパンフレットが握られているもの、辺りが暗いせいで読もうとしても何が書かれているのかは分からなかった。顔を寄せてうつすらと見えた題名には知らない文字が書かれていた。

その劇は一本の電話から始まった。正確には電話をかけ終わってしばらくした時点からだった。舞台の上には急な雨に降られて電話ボックスの中で雨宿りをしている少女が一人、ただ長い影だけを壁に投げかけている。背丈からして中学校の高学年くらいだった。

『本当に、馬鹿みたいだ』

その眩きに応じるものは何も無かった。通り過ぎた車のヘッドライトが緑色の受話器を照らしていく隣で、少女は何も見えてはいないままに天を仰いで立ち尽くしていた。少女が覗き込んだ手の内には十円硬貨が一枚、鈍い光を反射していた。響き渡る雨音は激しさを増すばかりだというのにそれを防ぐ傘はどこにも無かった。

『夜の方が好きだ。昼間よりはずっと良い。一步家の外に出てみれば、いつだって夜の

中には誰もいないから。夜はチャイムも鳴らないし、時計を気にする必要も無いから。私が自室のベッドの上で瞼を閉じるまでは、夜はずっと私のものでいてくれるから』

聞き覚えのある声がスピーカーから響く。しばらくそこから動かずに留まった後で、その影は電話ボックスを出ていった。そして少しの間だけアスファルトの上をさまよってから、やがて川に浮かんだ木の葉のように目指す方角を家へと定めて少女は歩きだしていった。

『あの家には戻りたくない。明日になってほしくないからではない。私はこの暗がりになりたいのではなくて、ただここに逃げ込んだだけなのだ』

モノローグは雨にまみれながら少女の影と共に進んでいく。靴底が地面と擦れ合う音も、蹴られた小石が転がる音も、水溜まりを踏み散らす音も、全ての音が灰と透明な色に塗り替えられていた。彼女の家の曲がり角が遠くに見えるのと、そこで舞台は暗転して静かになった。

舞台上に再び照明が戻ると少女は長い一本道にいた。雨足はまだ弱まってすらいなかった。反対側の歩道に設けられた街灯の並木がわずかに夜の闇を切り取っていた。私はこの幕間にあった出来事を知っている。彼女は家の前で鍵を無くしたことに気が付いて、今はそれを探しに来た道を引き返しているのだ。舞台の上にはいたのは杉本有理奈の影だった。

『夜が好きだった。夜の外に行けばひとりじゃなかったから。夜の向こう側に行くことができたから。今の私はもうどこへも行くことは無い。与えられた厚意に縋りついておきながら、自らそれを拒んで彼女の元を去ったのだ。いや、本当はそんな小綺麗なものでもなかった。ただ彼女が自分とかけ離れていくのが苦しくて、それに気付くことさえも恐ろしくて、私は夜の外にすら背を向けて見えないようにしただけだった。だから、私達はもう一度あの狭い部屋で会うことはできない。それなのに、未だにあのデスクライトの黄色い光に照らされる自分の姿を想像してしまうだなんて、本当に身勝手に都合の良い話だ』

十字路の手前にある横断歩道に差しかかるまでその額縁には入れられない一人語りは続き、それが終わると同時に彼女の足も止まった。彼女の目には傘をさしたまだ中学三年生だった青空が映っていた。まるで別々の曲が演奏されているみたいに彼女達が交わす言葉は空回りしていく。口にする必要の無いやり取りの裏ではそれぞれが砂を掬い上げるような空虚さと焦燥を感じていた。止まない雨と歪んだ音の奔流の中、青空が傘を差し出したことで二つだった曲は少しずつ重なり合っていく、やがて一つの傘の下で同じメロディを奏でた。鍵を探すという目的はもうどこかへ行ってしまうていた。そこでまた場面は暗転した。

次の場面へと移っても舞台の上はまだ暗いままだった。明かりの消えた小さな部屋

に目を凝らせば見えるくらいのおぼろげな輪郭が二つ、並んで背を壁に預けている。風呂上がりの体には少し暑く思えるような夜だった。その手の内にはまだ暗闇の中で触れた彼女の傷跡の感触が残っていた。

『小学生の時……何もかもが嫌になつて自分で自分を刺したあの時、あのまま上手く死んでいなくてよかつた。本当に、生きていてよかつた。今ならそう思えるよ』

青空はまるで憑き物が取れたような声でそう呟いて小さく微笑んだ。その視線の先にあるのは町の営みと雨の残滓だけだったけれど、あの時の私達には確かに見えていた。雲が全てを覆うその上で、夜空を埋め尽くすほどの無数の星々が手を伸ばせば届きそうなくらいに煌めいているその様が。

『ねえ有理奈。いつか……きつといつかこの町を出たらさ、一緒に暮らそうよ。小さな部屋を借りて、二人だけの部屋で』

『うん。きつと、いつか。私達のことなんて誰も知らない、青空がその傷のことなんて忘れられるくらいずっと遠くで』

『約束だよ』

いつしか雨音は聴こえなくなっていた。二人の声が遠ざかっていき、そこで一度舞台の幕が降りて周囲が明るくなった。カーテンコールは無く、今はどうやら幕間のようだった。気付けば今まで膝の上にあつたはずのパンフレットが無くなっていて、右の席

には表紙も装丁も無い真つ白な冊子が置かれていた。遠くの方で誰かの足音が聴こえた気がして振り返ってみる。後ろの席まで見渡してもやはり私の他には誰もいなかった。

左の席にも目を向けてみるが、そこには何も置かれていなかった。代わりに触れてみると微かな温もりが残っていて、シートが少しばかり湿っていた。私は席を立つて足音の後を追っていった。

予定通りほとんど始発に近い便でこの町を発った。このまま午前八時を少し過ぎた辺りでまた別の路線に乗り換えて、その次はバスに乗ることになっている。やはりこんな朝早くから出る特急電車を利用する人などほとんどいないらしく、この車両の中ではスーツ姿の男の人が眠りこけているばかりで、あとは頬杖をついた私が車窓にうつすらと映っているだけだった。列車の振動に合わせて視界が小さく揺れ動く。窓から見える物が次第に山や木々から鉄とコンクリートでできたの人工物へと変わっていくのを見ると、かえって自分がどんな場所に住んでいるのかを図らず教えられた。

「この様子なら、たぶん正午くらいには到着するかな」

私はこれから実家へと向かう。昨日の夜に父が急病で倒れたとの報を受けてから一晩明けての急な行路だった。電話を受けたすぐ前に搬送された先の病院にて手術が行

われ、父はそこで入院しているとのことだった。話によれば今もまだ意識は戻っておらず、医者が言うには今まで通りの生活へ戻られるというようなケースばかりではないので、それにばかり期待するのはよくないとのことだったらしい。『こちらとしても最善は尽くすが、良くても後遺症、最悪の場合も覚悟してもらわなければならぬ』。父はそれくらいの重体にあるのだと電話口の母はヒステリックを起こしかけた声で話していた。少なくとも私の知っている範囲では父に持病などは無かったけれど、それももうかなり前のことになる。詳しいことは聞きそびれてしまったが数ヶ月くらい前からその兆候はあったのだという。

私は悲しんでいるのだろうか。それとも安堵しているのだろうか。私が今何を思っているのか、自分でも分からなかった。誰も喜びなどしないのにただ体裁を保つ為だけに呼ばれ、望まれてもいないような再開をして今更何を話せというのだろうか。私は向こうで何をすればいいのか、それも分からなかった。では、私自身は何の為にあんな所へ向かっているのだろうか。それもやはり、私には分からなかった。

「そうなんだ、くらいにしかな思わなかったよ」

鈍く私の顔を映す銀色のトランクケースに向かつてぼつりと眩く。このケースの中には着替えの類だけでなく、それ以外の物も入っていた。真つ黒なブラウスとスカート、それと蘇芳の数珠が。



母の言葉を聞いた時、私はたしか驚いた。ただ驚いただけだった。そして、冷酷なくらい落ち着いた思考でこれからのことを考えた。大学のことや両親のこと、会いたくない人達のこと、そしてこれから起こるかもしれないものことなどを。その全てがただの保身だった。あの時、何かふつうの家族らしい感情が私の心のどこか隅にでも潜んでくれていただろうか。ただ、このケースの中身の出番が無ければいいなと思える程度には家族を思うことはできたようだった。たったのそれだけが私の心にはあつたようだった。

電車は数十分くらいかけて次の停車駅に止まった。もう一人の乗客は思い出したようにリクライニングシートを元に戻して、それから急いで席を立った。そのまま早足で歩いていく彼の後ろ姿がやや埃を被った窓ガラスから見えた。それと入れ替わるようにして今度は見るからに忙しなさそうな厚化粧の女性が別の車両に乗り込んできた。私はそれらを見送ってから小さくあくびを一つして流れていく駅の看板を眺めた。景色が動いているようなそれ以外が動いているような、しばらくの間、自分がどこにいるのか分からなくなった。自分がある所から揺すぶられながら、まるで自分自身もやがてかかったような薄ぼんやりとした思考の中でどちらの瀬にも漂着できずに大きな川に浮かんでいる葉であるかのような思いに囚われた。

意識をはっきりさせたくて、朝食の代わりにと持って来た生姜を入れた白湯を飲んで

一つ息を吐いた。まるでそれらが根で繋がっているかのよう、その行為が呼び水となつて彼女の顔を憂いと共に宙に浮かばせた。朝早くの出発であつたためとはいえ、青空に何の一言も言わずに家を出てしまったことが小さな心残りとなつていた。

「…行きたくないんだろ、たぶん」

『もしも有理由がいてくれなかつたら、きっと私はこの街でもひとりぼっちだつたら』。昨日の夜、誰も目もくれないような石段の真ん中で彼女は私にそう言つてくれた。酷な事ではあるけれど、事実としてその言葉には本当に嘘や偽りは無かつた。かつての彼女はよく知人達に囲まれていて、学内での私や結花との関わりは今ほど多くはなかつた。平たく言つてしまえば、あの部屋の外へ出てしまえばもう私達は互いに別の世界の住人であつたのだ。しかし、その人達も年が開けてしまえばもう私達は互いに別の世界の人となつてしまった。その理由などわざわざ言うことではないだろう。彼女に求められていたのは『普通』の人であることだつたのだ。皆と異なる特徴を持たず、皆が有するものだけを持つているような、そういう人だつたのだ。そしてその皆がいなくなつた後で、最後に私と友人の結花だけが残つた。だから、結花がいるとはいえどもそんな彼女を置いてどこか別の場所に向かうという行為には及べないでいた。しかし、それと同じ日に彼女はそんな私の態度を拒んだ。憐憫などという残酷なものはいらないのだと、青空はそう私に示した。そんなはずは無いと思つていても、青空の瞳に映る私は知らない

内に彼女を『そういう目』で見ているらしかった。

その夜から今に至るまで、そのことがずっと自分の心を悩ませていた。はたして私は彼女に対してほんのわずかでも後ろめたい感情を抱いていなかったと言えるだろうか。どこかで優越感のようなものを感じてはいなかっただろうか。それは今も無いと、そうはつきりと言い切れるのだろうか。父の事もやはり大きな問題ではあるものものこちらもまた同じくらいに、ともすればそれ以上に心の水面を掻き乱していた。

「きつと…違う、はず」

私は強い意思を持って『そんなことは無かった』とは言えなかった。完全には否定できなかったということは、それはつまりそういうことなのだった。今まで気付きもしなかった、気付こうともしてこなかった。けれど本当は言葉にならない内に自分自身がそれを一番に理解していたような気がする。私はただ、彼女と一緒にいただけだった。そのはずなのに。私はたぶん、ひどく醜い心の持ち主だ。

『次は、榎決町。榎決町に停まります。お出口は右側です』

この世界で彼女と出会いさえしななければ、人を信じるということを知りさえしななければ、きつと私はこんなにも辛い気持ちなど抱かなくてもよかつたのだろう。こんなにも薄汚れた自分の姿をまざまざと見せつけられることも無かつたのだろう。こんな形ではあつても、全てはあの夜から続いていたのだつた。

車窓からの景色はファインダーの中にいるように静止した。また目的地に近づいてしまった。窓の外から視線を外す。私は重い息を垂れ流しながらケースの取手を掴んで立ち上がった。

それからまた電車やバスを乗り継いで、やはり十二時を十数分過ぎた頃に総合病院に到着した。病室は四階の東の端にある個室。そこに父はいるらしかった。電車を待っている間、滞り無く到着できそうだという旨の連絡を入れた際に母からそう聞かされていた。

院内はいやに涼しく、そして静かだった。受付に行き父の名前を出すと、看護士と思われる人の顔がどこか険しいものになった。そして、私が父の家族であることを確認してからその部屋が集中治療室であることや、集中治療室に入院する患者がどのような人であるのかを教えてくださいました。

「あの、父は、助かりそうですか?」

面会許可証を受け取った手でそう話しかける。どのような思いがあつてそんなことを言ったのか、私自身も上手く理解できなかった。おそらく、本心からそう口にした訳ではなかったのだと思う。ドラマや小説の中でよく目にしてみたように、求められたようにただ形式的にそう訊ねただけのような気もした。受付の人はより一層に眉間の皺を深くして、それによって口を開くよりも前にこれから言おうとしていることの全てを示

した。おそらく、それこそフィクションの世界のように全快とはいかないということなのだろう。

「私は医師ではありませんので、私の口からはなんとも……ただ、どうか悔いのございませんように、としか」

それを聞いてもやはり思う所は何一つ無くて、『そうですか。ありがとうございます』なんて他人事みたいな返事が舌から滑り出ていった。精々『もしも』の話がより具体的なイメージを持つたくらいのもので、胸中にはささくれくらの痛みも無かった。

病室へと向かう間中、早まる鼓動を抑えようとガラス張りのエレベーターから見える院外の様子に視線を注いでいた。そうしている間は気休めくらいには不安も薄れてくれた気がした。それは父の安否に対する不安というよりは、ただの我が身可愛さによるものだった。実は父はもう目を覚ましていて、入室した私とまた言い争いになるのではないか。そんなことはきつとあるはずが無いだろうに、深く根を下ろした薄い影を拭い切れないでいたのだ。眼下の通りでは子どもが手を引かれ、人が歩いていて、車がゆつくりと走っていた。そこに笑顔は無かったけれど、苦しい顔をしている者も無く、何の狂いも無く皆の日常が進行していた。青空と私が住んでいたあの町は見えている範囲とは真逆の方向にあるのでここから見るとは叶わなかったけれど、きつとあの町でも同じように変わらない営みが続いているのだろう。私の家族はもう一度その中に入っ

ていけるのだろうか。私はどちらがいいのだろうか。私は父がどうなつてほしいと思つているのか、少し分からなくなつてしまつた。

病室の前で二度、扉に触れたまま三度も意図的に深く息を吸つては吐いた。病室を間違へてはいないかと四回は部屋の番号を示すプレートを確認した。そこは集中治療室の個室であり、受付でも聞いた通りの番号だった。まさしく私が向かつていた部屋であり、その向こうでは父が眠つているようだった。鈍い動きで扉の前のインターホンを鳴らす。応対した人に再度父とは家族であることを説明してから入室時の手順や注意を受け、重い足取りで中へと進んだ。

面会の許された時間は本当にごくわずかなものだった。他にも部屋に入る為に煩雑な手順が必要であつたり、一日に行う面会の回数や人数に制限があつたりと、様々な点において素人目にも父の容態の深刻さが見て取れた。部屋には他の面会者は誰もいなかった。中央のベッドの上に頭を起こしたて仰向けにされた状態の父がいるだけだった。様々な機械が生気の無い父の周囲を取り囲んでいて、そこから伸びる管が父を繋ぎ止める鎖となつていた。父が私を叱るようなことは無かつた。体に取り付けられた様々な器具や呼吸器のような物を除けば目の前にいるそれは私が覚えていた父の姿そのものに見えた。私はといえば感染症の類を防ぐ為に用意されたマスクやガウンに身を包んでいて、一見して私とは分からないような出で立ちだった。

室内はいかにも潔癖な病室らしく必要な器具や機材が必要な場所に置いてあるばかりの無機質なものであった。そういう処置であるとは知っていても、見舞いの品や花の一輪も無いこの部屋はどうしてももの悲しく思えた。父は花を愛でるような人でもないけれどこんな所で日夜を明かすのはきつと寂しいことだろう。もつとも、それもこの景色が父の目に映っていればの話であった。

「えつと……久しぶり。私の声は聞こえているのかな？」

返事は父の代わりにいやに甲高い機械音がしてくれた。よく見ると父の顔は少し老けていた。目尻や口元の皺は深くなり、頬の辺りには知らないしみができていた。白い清潔なベッドの上に横たわる二本の腕も気のせいかな細くなったように見える。父は小さくなっていった。それもそうだろう。なにせ父とはもう四年とそれ以上の間顔を合わせていなかったのだ。自分の背丈が伸びたというのに父だけが歳を取っていないということなどありえるはずが無いのだ。

「本当は今の今まで会いたくないなんて思っていたんだけど、どうしてなのかな。そんなことはもう、どうでもよくなっちゃった」

奇妙な感覚だった。その姿からは不思議と負の思いは感じられなかった。むしろ今すぐには目を覚ますことは無いと知っている分、等身大の気持ちで父に接することができた。面会を許されたのは十分にも満たないくらいの短い時間であるけれど、この瞬間

が今までで一番家族らしく振舞っていられる気がした。

何も言葉を発さぬまま時計の秒針だけが巡っていく。何も言う必要が無かった。私にとつてここは決して届かず存在もしない、けれどずっと求めていた蜃気楼のような場所だった。この空間に立っていられるのなら、この穏やかな虚妄の中でたゆたってられるのなら、私はたったそれだけでよかった。自分のことも自分以外のことも、今だけは何もかもをかなぐり捨ててしまつて、いつまでもこの幻に見とれていたかつた。しかし、時間が一本の線である限りそれは決して叶うことの無い夢物語だ。時計を見るともう退出の時が迫っていた。

最後にもう一度だけと、父の顔を脳裏に焼き付ける。次にこの人の顔を見るようなことがあるとすれば、その時にはもうこの人は偶像の父親と同じ存在ではなくなつてしまふから。だから、これは私なりの弔辞のつもりなのだつた。

「父さんとの記憶なんてほとんどが叱られたことばかりだつたし、良い思い出なんて一つも無かつた。父さんからしてみれば、私なんて望んでもいない子だつたんだよね。母さんから聞いたことがあるの。私が生まれたから結婚したんだつてね。別に今更それを責めるつもりなんて無いよ。私だつて、この先もずっと父さんを好きになることなんて無いと思うもの。だけどね、父さんの娘だからつていう理由だけじゃなくて、一個人としてもいつぱい迷惑をかけてきたから。だからさ、それでおあいごとということにし



て、帳消しにしようよ。これで、全部おしまい。もう時間だし、そろそろ帰るよ」

自分が言ったことを耳にして他でもない私自身が心の底から驚いていた。それから自分の口角が緩やかに吊り上がっていることに気が付いて、もう一度驚いた。口にしてみて初めて真つ黒な記憶で織り上げられたカーテンの向こう側が見えた。実体を持つ存在しない父親と対峙した今、ようやく自分が父に抱いていたものが確認できたのだ。私はきつとこの人が亡くなったとしても泣きはしないし、悲しいとも思わない。けれど、こんな取るに足らないようなほんの小さな時間でも父親と二人で過ごせたこと。それだけは懐かしむことができると思う。許しはできないけれど、受け入れることができる、そのたつたひと時を。

退出するその際に、父の姿を目に焼き付けるみたい取って付けたような別れの挨拶を告げた。否が応でも今生の別れとなる虚像の父に『さようなら』と言った。これでもう、思に残すことは無かった。父の表情は動かないままだった。

父の容態が急変したという連絡を受けたのはその日の暮れのことだった。その時分は長旅とそれ以外による色々な疲れから自室で仮眠をとっていた所だった。きつと疲れていなかっただとしても何か口実を作つてこうしていたことだろう。階下から聴こえてきた電話の着信音が奇妙な程に明瞭で、ぼんやりとした確信を伴つて私を現の世界へと引き戻した。今や物置となつていたこの部屋には物の輪郭と混ざり切つた夕闇で満

ちていた。枕元の明かりを探すが早いか母の声が騒がしくなってきた。即座に確信が事実となったことを理解した。埃臭いベッドを出て身なりを整え、急ぎ足に階段を降りる。そこには血相を変えた母がいた。

虫の知らせというものなのか、意識よりもずっと深い場所でこうなることを予め理解していた。病院へと戻った時には医師や看護師の人達がひっきり無しに出入りしている状態で部屋に入ることはできず、次に父の顔を見たのは死に水を取る時だった。その表情は昼間に見た時とほとんど変わっていないようで、けれども上手く説明できない何かが違うていた。ただ漠然と、眠っているという訳ではないことだけが感覚的に理解できた。目の前にいる父によく似たそれは少なくとも生きていた頃の父ではなかった。父は点になったのだ。直線から線分になって、平行線の延長はもう止まったのだ。

「…じゃあ、ね」

母は目元を抑えていた。母は十九年とそれ以上、父と歩んできた。私は十九年、下宿を始めたことをふまえると十五年と少し、父と一緒にいた。私は泣かなかった。もしも私がこの町に残っていれば、私は泣いていただろうか。それでも駄目だというのなら、私が母と同じだけ父の隣で過ごしていれば、涙の一滴くらいなら流せたのだろうか。誰にそれを見せたかったのか、私は母に倣って堪え切れない風を装って俯いていた。いつまでそうしていればいいのかを、誰も教えてはくれなかつた。

それから六日間が目まぐるしく過ぎていった。死亡時の手続きや遺産の分配、式場の手配に親族への連絡と、母と私だけでは務まり切らないような忙しさだった。もちろん父は遺言書など用意していなかったし、母も予め葬儀社との連絡などはしていなかった。どちらもまさかこんなことになるとは思ってもいなかったのだろう。雑多な作業に追われている間は母と余計な言葉を交わさなくてもいい上に、私自身としても色んな思いを忙殺できて気が楽だった。部屋で一人静かにしていると由来の知らない自己嫌悪に苛まれ、一步部屋の外に出ると心が鉛の塊みたいに重くなった。

家の外では父のこれまでの話に耳を傾け、家の中ではこれから先の話をしていた。父は思っていたよりも交流の少ない人だった。父は正月くらいしか実家に帰らず、葬式では数年ぶりに祖父母と顔を合わせた。また、父は貯蓄の多い人でもあった。おかげで私アルバイトで貯めていた分も含めればなんとか大学を卒業できそうなくらいの金額が私の元にも遺された。父は誰かとの付き合いも無く、お金の使い道も無い人だったらしかった。私が父について知れたことはせいぜいそれくらいだった。結局私にはどうして母が父を選んだのかも、その末に涙を流したのかも、最後まで何一つとして理解できないままだった。

この家で過ごす最後の夜、ベッドの上で父のことを考えた。次に私が呼ばれるのは四十九日の時だけなので明日からはまたしばらく元の暮らしに戻る。全てが一段落し

たことであろうやく心にゆとりが生まれたのだろう、目を閉じると寄せる波のように父とのあれこれがい思い出された。父の顔を思い浮かべて苦しい気分にならなかつたのなんて、ずいぶんと久しいことだつた。

「もう、あの人はこの家にはいないんだ」

机の上の骨壺があるはずの方を向いて呟く。父はよく燃えた。父は星にも煙にもならず綺麗な白色をした灰になつた。その時も母はやはり顔を手で覆つていた。それはきつと、どんな道を進むことになつたとしても父と母とが夫婦であつたからなのだろう。どれだけ願つても父と言葉を交わすことは叶わないと、そう頭と心で理解したからなのだろう。真つ暗でありながら見慣れない天井を仰いで考える。その人ともう二度と会うことができないと知つてしまつた時と、その人ともう二度と心が通うことは無いと分かつた時と、どちらの痛みの方が辛いのだろうか。その両方を知つてしまつた私では、正しい答えを導き出すことはできなかつた。もう眠つてしまおうと瞳を閉じてみても、時計の秒針の音が何度も鼓膜をくすぐつて私をこの夜に留めようとしていた。「本当はね、私だつて、泣いてあげたかつた。泣いてみたかつたんだよ……」

父だつて、人を傷付ける為に生きていた訳ではないだろう。私だつてそうだ。誰だつてただ幸せになりたくて、その途中でどうしても誰かを悲しませてしまうのだ。そしてそうした結果の数々が『もしも』なんてものも無く生きている間中ずつと積み重なつて

いくのだ。それでもやはり私は今とは違う、どこかにあつた別の道のことを考えずにはいられなかった。仮に父が生きている内に一度でも、何か一言でもこんな風に本音を言っていたのなら、彼の人生は今よりもまだ少しくらいはましなものになつていただろうか。例え笑い合うことはできなかつたとしても、せめて隣にいることくらいはできたのではないだろうか、と。全てはもう過ぎ去つてしまつた、『もしも』の話だ。

私もいつかは死ぬ。父のようにいつとも知らされずに誰にも別れの挨拶の一つすら言えないで死ぬのだろう。まさに明日にも、その日が永訣の時であるとも教えられぬまま青空や結花の元を去つていくこともあるかもしれない。そして、今際の際にこう思うのだ。もしもこうなると知つていたのならば、もつとできることがあつたはずだと。それが一年後のことだとしても、十年後のことだとしても、何も変わりはない。たつた一つの後悔すらしない人生なんていくら探してもあるはずが無いのだ。私達が選んで生きるのはいつだつて最適解であつて、決して正解ではない。時にはそれすらも間違えて震える漸近線に大きな波を起こしてしまうこともある。水面に投げられた石自身には波紋を起こすことを避けられないというのに、石はいつだつて不意に水面へと叩きつけられるのだ。だから、私は明日も石を拾う。明後日も明々後日も、いつまでだつて石を拾おう。投げる為ではなくて、ポケットにしまつて大事に持つておく為に。

「おやすみなさい、父さん」

もう一度、深く瞳に帳を落とす。最後に見た病床に伏す父の顔がやけに醜の裏に残っていた。

また同じ夢を見た。やはり題名が読み上げられることは無かった。今度の劇はとある男性の生活をただ淡々と描いただけのものであるようだった。今度はパンフレットを持つていなかったが頭の中でそう理解していた。

男には妻と娘の二人の家族がいた。スポットライトの当て方のせいで顔はよく見えなかったが、主人公の背格好や歩き方にはどこか見覚えがあった。劇が進むにつれて少しずつ登場人物達の背丈や装いが変わっていく中で、どれだけ時が進み季節が巡っても同じような台詞だけが定型句のようにならずと繰り返された。そしてたまに違う言葉が聞こえたり、声を荒らげたりする、そんな退屈なものだった。

『おかえりなさい』

『ただいま』

『おかえりなさい』

∴

『おかえりなさい』

『ただいま。おい…』

∴

『おかえりなさい』

『ただいま。おい…』

…

『おかえりなさい』

『ただいま』

思わず席を外したくなるくらいに冗漫で展開には起伏と言えるものが何も無く、一向に終わりが見えない。なんともつまらない劇だった。そこには何も感じ取れるものなど無いはずなのに、それなのに、不思議と目を離すことはできなかつた。

『これで、よかつたの？』

誰もいないはずの場面でその声が劇場の中を駆けた。台詞ではあるようだが、誰が発したのかも、どこから聞こえているのかも分からなかつた。言葉そのものは確かに耳に入っているのにその声が男性のものなのか女性のものなのかすら判別できなかつた。その台詞に対して言葉を返す者はいなかつた。行く瀬の無くなつたその声は奇妙なくらいに残響を置き去りにして舞台袖の方へと去つていった。それと時を同じくして、その方向から会場全体に何かが倒れたような音が響き渡つた。そこで唐突に舞台の幕は降りた。これの何が面白かつたのだろうか、後ろの席からはちらほらと拍手の音が聴こえてきたけれど、私はそこに誰がいるのかなど気にも留めなかつた。

そのままカーテンコールも無く辺りが明るくなった。どうやらこれで終わりのようだった。私は席を立って隅の階段から舞台へ上がった。向かうのは先程大きな音がしたカーテンの裏の方だ。乱雑に散らばった小道具達を避けて進んでいく。暗がりで見えなく見えなかつたけれど、どうしてなのかそこに何が置かれているのかは全て知っていた。奥の方にある全身を映せるくらいの鏡台の裏、そこへまっすぐに手を伸ばしてトランジスタラジオを拾い上げた。それがそこに置いてあることが、そしてそれを手にすることが、私にはごく自然なことのように思えた。そこから踵を返して舞台を降り、出入口の厚い防音扉を開く。いつか聴いた足音はその奥に向かって駆けていった。

扉の向こうには果ての見えない廊下が続いていた。そこに等間隔に並べられた顔の見えない人達が何かを言う訳でもなくただこちらをじっと見つめていた。その人達の横を一瞥もくれること無く足早に過ぎていく。廊下の先には茜色に染まった世界があった。

そこはどこにもでもあるような教室だった。規則的に並べられた机の天板には黄金色の西日を溶かし込まれ、入口のドアの横には綺麗な黒板が据えられている。その壁は石膏のボードで覆われており、部屋の隅には夜と同じ色をしたグランドピアノが置いてあった。ここは音楽室のようだった。

一つだけ引かれたままの木椅子にラジオを置く。振り返るとどこにも劇場は見当た



らなくて、どこまでも続いて見えるリノリウムの廊下に置き換わっていた。恐る恐る椅子に座ってピアノと向かい合ってみる。胸の奥が痛むような、あるいは掻きむしりたくなるような、けれど心地良きの勝る気持ちになった。

『弾いてみてよ。久しぶりに』

先程の劇場で聞こえたものとは違う声がラジオからノイズ混じりにそう話しかけた。中央の鍵盤を弾こうとする毎に手先が痺れて指々の関節が石のようになった。どうしてもそこから先へは進めなくて、何度も指先が空回りしては虚を撫でていく。

『大丈夫。もう誰も止めはしないよ』

まるで優しく背中を押してくれるような、胸のつかえを取り払ってくれるような、その声にはどこか不思議な力があつた。言われるがままに一通りの音階を鳴らしてみても音のずれを確かめる。調律に全く狂いは無かつた。その手のままに十本の指をモノクロームの舞台の上で踊らせる。演奏者は私一人だけ、聴衆もまたたった一人だけだつた。演奏するのはシューマンの『子供の情景』。あれだけ練習したのだ。譜面は無くともこの手が全てを覚えていた。

黒鍵の沈む感触を思い出した。白鍵を押した時の抵抗がひどく懐かしかつた。そこには時間なんて存在しなかつた。けれど、軽やかに弾む指とは裏腹にその音はいつまでも所在無さげで、躊躇いがちに孔だらけの壁へと飛び込んで消えていくばかりだつ

た。途中で黒鍵に向かうはずの指が逸れてしまった。私はそこで手を止めて、もう弾き直さなかった。名残りも何も抱かずに静かに蓋を閉じる。何かがひとつ、足りなかった。

ピアノの屋根を閉じようと腰を上げると足下にパステルカラーの上履きが二足、隣同士に揃えて並べてあるのが目に入った。一步後ろへ下がって自分が履いている物と見比べてみる。二足とも今の私のそれよりも少しばかり小さく、私の履いている靴はほとんど黒に近いどめ色に染まってしまっていた。ここでも何かがひとつ、足りなかった。その何かを探すようにトランジスタラジオを片手に部屋を出て、窓の外の木々に沿って歩いていく。それが何であるのかを本当は知っていたし、ここには無いということもまた理解していた。けれどもそのこと自体が霧の中にいるみたいにあやふやになって、私の足を一步、また一步と前へ運ばせた。

ラジオも私も、何も言葉を発そうとはしなかった。扉が霞んで見えなくなっても私達は光に惹かれて翔ぶ蛾のように呆然と彷徨い続けた。いつの間にか屋根は無くなっていて、私は校舎の外を歩いていた。空には厚い雲が広がり、地面はコンクリートに覆われていた。暗雲が更に黒に染まり雨粒が頬を濡らした頃、いつしか辺りはかつてよく見た景色になっていた。目の前には父のいた場所と『杉本』の表札が見える。明滅する淡い灯りの下には翡翠色の翅が散らばっていた。

『違う。ハハハじゃないよ』

その声に導かれるように丁の字になった路地を左に折れる。立ち止まったのはほんの少しの間だけで、すぐにまた雨に身体を濡らしたまま歩き始めた。傘はどこにも無かった。町の外れにある小さな公園を、暗い裏通りを、十字路の傍にある電話ボックスを、傘もささずに過ぎていく。道すがら側溝の縁で何かが町の灯に煌めいた気がしたが、それにはもう目もくれなかつた。私が探していた何かは、傘でもあつた。そして誰ともすれ違うことは無いまま、赤い屋根の家の前で足音は一度止んだ。

『違う。ハハハじゃないよ』

そう、ここじゃない。彼女がいるのはこの町ではない。明かりの無い二階の一室に視線を流してから糸が吊られているような気分でもた足動かす。それが本当に自らの意思によるものなのか、今や明確に判断することができなかつた。雨は未だに降り止む兆しを見せていなかった。

郊外の方まで来てもその単調な動作は止まらず、遂にはこの記憶の地図の端にまで来てしまった。道の奥には数本ばかりの街灯が枕木のように頼り無く佇んでいる。この道がどこへ続くのかも、そしてその先に何があるのかも、ここにいる私は何も知らない。

「まだ、ハハハじゃない」

だからもう一步、足を前に出す。ラジオはここに置いていつてしまおう。傘を探すの

は、もうやめた。

目が覚めると空はまだ暗く、時計を見ると日が昇るにはまだかなり時間があった。ぬばたまの町では電車もバスも皆が眠っていた。開きかけた瞼をもう一度閉じる。今度はもう、夢の続きを見ることは無かった。

慌ただしかった五月も終わりを迎える金曜日。明日からは六月になる。日曜日には四十九日の法要があるので明日の夕方くらいまでにはまたあの家に行かなければならないが、それが終われば忌明けとなる。そうなればあと一年くらいはもうあそこへ戻らなくて済むし、アルバイトのスケジュール調整も楽になるといふものだ。他の法要は遠方に下宿しているからと口実をつけて向こうへ行くのを避け続けてきたのだが、せめて親戚一同が集まる初七日と四十九日くらいは顔を出しておくべきだという話にまつまって、列席する運びとなったのだった。

その日は午前中で講義が終わり、明日以降のことを考えて日持ちする料理を用意しておこうと半日かけてビーフシチューを作っていた。青空はこれができる頃までは帰ってこない。今日は五時限目まで講義を受けた後、彼女はここには戻らずに結花の所でリハビリテーションを受けることになっていた。

「うん。まあ、よし」

小皿に移して味を見てみる。記憶にあるその味とあまり違いは無かった。より長く持たせる為に牛乳や生クリームは加えないでおいた。青空は少し前に二十歳を迎えたばかりで飲酒の習慣は無く、私の方はまだ未成年なので当然赤ワインなんてものはここには置いていなかった。他に何か代用できそうな物も思い浮かばなかった。少々味は悪くなるかもしれないけれど赤ワインは使わないことにした。それでも時間さえかけてやれば案外それなりの味になるものだった。

「一度にこれだけ沢山の量を作ることなんて、今までに無かったな」

量だけではなかった。面倒な下準備をしたり火にかけて後も逐一具合を確かめたりと、このような手間のかかる料理なんて一人暮らしをしていた頃であれば献立にすら思いつく浮かばなかったことだろう。普段のそれと比べてみると作り置きにしてはやけに手の込んだ物だった。実家に戻るとはもう既に決められていたとはいえず、やはり自ずと彼女に対して罪悪感が湧いてくるのだった。彼女を置いていってしまうことへの罪悪感が。

「…ねえ青空。私は今も、『そういう目』をしているのかな」

今すぐ洗面台の前に行つて鏡に映る自分の顔を覗いてみれば、そこにはきつと見飽きたくらい変わり映えしない自分が晴れない顔をして立っていることだろう。何の変哲もありはしないいつもの瞳といつもの口と、眉と、鼻と、そして表情だ。そうしてその

目は語るのだろうか。そう思ってしまうのは今の彼女が自分よりも弱い者だからだと。彼女は病気を患っており、誰かの助けを必要としているという認識は今でも間違っていないと思っている。しかし、たったそれだけのことがこの眼差しを作り上げた唯一の要因なのだろうか。自分のあやふやな心もまた、このふつつつと音を立てる鍋のようにその底を見通すことは出来なかった。

固定電話に着信があったのは鍋を煮込み始めてから二時間くらいが経過した頃だった。コール音が二度鳴るよりも早く火を弱めて台所を出た。母親は私の携帯電話の番号しか知らない。となればおそらくは結花からの電話だろう。表示された電話番号を確認するとやはり彼女のものだった。きつと今日行われる青空のリハビリテーションについてのことだろう。しかし、私は二人のことには極力干渉はしないようにしているし、結花もまた最低限必要なこと以外はなるべく話さないように気を配っている。そういうった事情から、青空のことについて彼女から連絡を受けることなど本当に稀であった。

「はい。杉本です」

「もしもし有理奈？突然ごめんね。ちよつと訊きたいことがあって。えつと、今は一人？」

結花は藪を探るような声でそう訊ねた。おそらくは青空に関することで他言できな

いような何かがあるのだろうか、まさか私が誰かに言いふらしたりなどしないことくらい結花だって承知の上のことだろう。ましてや今はこの部屋には私しかいないので尚更だ。その質問の真意を探りかねて私は沈黙の内に肯定の意を示した。結花はそれを汲み取り、鈍い動きで息を一つ吸ってから話を先へ進めた。

「そう。誰もいないんだ…あのね、藤崎さんがまだ来ていないの。いつもならここに来る前に何か連絡があるはずなのに、それも受けていないから、もしかしたらそこにいるんじゃないかなって」

分かり切ったことなのについて反射的に振り返って室内を見回した。そこにあつたのはやはり今は誰もいない寂しいダイニングルームだけだった。慌てて自分の携帯電話を確認したがこちらにも新しい連絡は来ていなかった。

「電話はしてみたの？単に青空が今日のことを忘れているだけかもしれないし…」

「そう思ってたさっきから何度もかけてみたけれど、全然繋がらないの。メールを送っても返信が無いし、どうしよう」

何の言伝も残さないままにどこかへ行くなど普段の彼女からして考えにくいことだった。そうそう起こりえない話だし、あまり想像したくはないことだが、青空の身に何かあつたのではあるまいか。そんな考えが思い浮かんでしまつて全身を冷たい血が流れた。結花も同じような考えに至つたのだろう。言葉の端に動揺の色が隠せないで

いた。

「…青空を探してくる。もしかしたらこの近くにいるのかもしれない」

「待つてよ有理奈。私はどうすればいいの?」

「結花はいつ青空が来てもいいようにそこにいて。何かあったらまた連絡するよ」

いても立つてもいられなくなって、別れの挨拶も無しに追い立てられるように受話器を置いた。そのまますぐに鍋の火を止めてから、何も持たないで外へ飛び出した。

どこかにあてがある訳でもなかったが、だからといってその場でじつとしてなどいられなかった。

家を出てから色々な所を探し回った。駅前広場や辺りの公園など、この町を一巡りくらいしてみてもそのどこにも彼女はなくて、今はどこも知れない人通りの無い路地裏を歩いてる。もう一駅分か二駅分くらいは歩いただろうか。道もよく知らないのに闇雲に歩いたせいで私自身が今どこにいるのかすらも怪しかった。いつしか空には西から流れてきた暗雲が広がり、灰をばらまいたみたい曇天に変わっていた。ここにも彼女の姿は見当たらなかった。

青空は傘を持っていっただろうか。足を止めて玄関の景色を思い出そうとする。自分の靴の隣には彼女のいつもの白いスニーカーが無くて、芳香剤が少し減っていた。傘立てはどうだっただろうか。そこに私の傘はあったことだろう。その隣には何かあった



か、何があつたか。視線を路地の向こうへと戻す。

「青空、どこにいるの？」

この辺りにはないと分かつているのに、意味も無く彼女の名前を呼んでみる。呼び声はどこへも行くことは無く夕方の肌寒さを覚える空気の中へと消えていった。返事の代わりのように空は冷たい雫を髪の毛の先に伝わせていき、それを合図に雨音がたちまちに全ての音を覆い尽くした。掌を虚空にかざして指先から滴る雨だれを見つめる。青空は今頃どこで何をしているのだろうか。青空が行きそうな場所など全く見当がつかないし、彼女がどうしているのかも、どうしてこうなってしまったのかも私にはまるで分からなかった。

思えば、私は何も見えてはいなかった。彼女が自ら見えない檻に閉じこもって他の誰にも触れさせないようにして、ずっとひとりぼっちで自分の心を守ってきたから。だから、私も彼女の見えない所ではなくて私が見ようとした所だけしか知らないでいられた。孤独を知るのは悲しい。孤独に慣れてしまうのはずっと辛い。私がそれを一番に理解していたはずだった。それなのに私は柘榴の実のその種子に、仮面を被って痛みを押し込めた彼女の傷に目を向けようとしてこなかった。そうやって彼女が苦しんでいてくれれば日常に入ったひびが広がらずにいてくれたから。そんな私が今更になって彼女の身を案じるなど、そんな虫の良い話が許されるだろうか。

「…青空は、どんな気持ちだったのかな」

そう呟いて空を見上げると夜が来るにはまだ少しばかり早い時間だった。青空も私も、あの時はまだ携帯電話など持つてはいなかった。今日と同じ晩春の雨が降っていたあの夜、公衆電話の受話器をたった一つの頼りにして彼女の声を聞いた。そして私の手には一枚の十円硬貨が握りしめられたまま、言えたはずの言葉と共に受話器を置いたのだった。私の居場所を知る術など無いのに、会える確信などありはしないのに、青空はただ私の身を案じるその一心だけであの雨が降る町の中でそんな私を探し回っていた。当時の私では気付くこともできなかったその気持ちは今なら少しくらいは分かる気がする。彼女はちゃんとしたこの雨をしのげる場所にいるのだろうか。無事でいてくれるのだろうか。彼女の気持ちの一片すらもこの手で掴むことはできなかった私だけ、紛れも無く青空のことを心配していた。それだけは確かなことだった。

「行かなきゃ」

一つ息を吐いてまた歩きだす。真っ白な砂の上から拾い上げるように、目をやれないでいたこと、目を背けてしてしまったもの達を見つけに私は歩調を早めた。ポケットの中で部屋の鍵がちりんと音を立てた。

更にもう一駅分くらい歩いた所で私のよく知っている通りに出た。まだ彼女が見つかっていてもいないのに、私は知らない内に自宅の辺りにまで戻っていたらしかった。かな

り前にもう夕日はここではないどこかを照らしに行ってしまった。厚い黒雲の向こうにあるはずの星達も私達には見向きもしない。あの時のようにもう一度偶然が起こってはくれまいか。そんな思いが濡れて冷えた頭を掠めて、それと時を同じくして携帯電話の通知音と雨粒が潰れる音とが入れ替わった。誰かからの着信ではなかった。受信トレイを確認すると新着のメールが一件追加されていた。差出人は青空だった。件名は無く、本文にはたったの一行、『私を探していたの?』とだけ書いてあった。

『よかった。ずっと連絡が取れなかったから、何かあったのかと思つたよ。今はどこにいるの?』

彼女に連絡する意思がある内にすぐさま返信を送った。今までどこにいたのか、どうして結花の元へ行かなかつたのかなどは訊こうとはしなかつた。青空が事故などに巻き込まれたりはしていないのなら、それくらいのことはどうでもよかつた。程無くして『ちよつと出かけていただけだよ』と返つてきた。今度はその後ろに『今は玄関の前にいる』という文が続いていた。

『鍵は持っているの?』

雨に晒されないように上着で庇つた右手で携帯電話を握りしめたまま、私は水溜まりを散らしながら家路を急いだ。メールを送つてから次の言葉が来る頃には既に最寄りの公園の横を過ぎていた。このまましばらく狭い路地を進んでいけば、じきに薄い苔色

と赤銅色の混じった街灯がひっそりと私を照らすことだろう。そこから錆びついた鉄骨の階段を上って奥まで行けば、そこが青空と私が暮らす部屋だった。

『持っているよ。だけど、ここで待っている。』

『雨も降っていることだし、私のことなんか待たずに部屋の中に入っていないよ。今日はよく冷えるから、外にいては体に障るよ』

『嫌だ。有理奈が戻るまで、私はずっとここにいます。』

『どうして?』。その五文字を打ち終えるよりも早く私の周囲は再び雨音に包まれた。二階の通路に設けられた防護柵の上に身をもたれかけた彼女の姿が目に入る。青空もまた私を認めると、苦しそうな顔をして空を見上げた。先刻から降り始めた雨はこの町を濡らしながら、一向にその勢いを弱める兆しを見せようとしなかった。

先程よりも一層足音の間隔が狭める。ちようど正面から見て袈裟懸けに造られた階段に足を乗せたばかりの所で突然頭の上で何かが軋むような音を立てた。間髪を入れずに同じ場所から鉄でできた悲鳴が聴こえて、それから背後で金属がひしゃげた。糸で引つ張られたように首を曲げると、まず折れた鉄の棒とビニールの傘がその先端を覗かせた。次に逆さまになった青空の瞳と視線がぶつかって、それらが桜の花びらが舞い散るようにゆつくりと、そして雨粒と並ぶようにまっすぐに地面に叩きつけられた。

「青空――」

まるで棍棒か何かを金属の板に打ちつけたような一際大きな音の群れが景色を塗り替えた。私はその声に出そうとしたのだろうが、口から出たのは狭い喉を通り抜けた空気の掠れた音だけだった。頭上のことなど気にもかけずに急いで彼女の元に駆け寄る。青空はうつ伏せになったまま起きようとしてくれなかった。幸いなことに、多少の怪我や青痣こそあれども一見して大きな傷は見受けられなかったし、意識もはつきりしているようだった。

「大丈夫？ 立てそう？」

その場に座りこんで青空の顔を覗く。彼女の瞳に写った自分の像が見えた気がした。彼女はそれに応じる代わりに上体を起こしそうとするものの、右腕がおぼつかなくて胸が浮いた辺りで崩れ落ちそうになって私に抱えられた。重くのしかかる彼女の身体を慎重に横たえる。その後二度くらい身を震わせただけで、それ以降はずっと脂汗を浮かべながら彼女は前腕の辺りを押さえて呻いていた。

「腕が痛むの？」

青空は苦痛に顔を歪めながら小さく頷いた。彼女の了承を得て恐る恐る袖をまくり上げると、肘から手首にかけての一面が真っ黒に染まっていた。さらに、普通であれば一本に伸びているはずのそれが少し曲がっているようにも見えた。尋常ではない様子を感じ、すぐさま携帯電話を取り出してダイヤルを百十九番に合わせる。先程の音を聴

いた他の部屋の人達が扉の向こうで心配そうに様子を見ていた。救急車を待つその間に私に何かできることは無いかと必死に頭を巡らせる。階段の下まで青空を移動させようにも身じろぎをするだけですら息を荒らげるので彼女を動かせず、この場で待つよりも他が無かった。やがて今の自分には何もできることは無いということを知り、せめてと落ちていた傘に手を伸ばした。

「大丈夫。すぐに救急車が来るから」

『大丈夫、大丈夫。』しきりにそう繰り返していた。握った小さな手はひどく熱を帯びていた。雨粒が傘の上でばらばらと弾けていく。その音と彼女の苦しそうな呼吸の音とが、既に夜の色となった静寂に溶けて混ざり合っていた。

青空は筆談ができない状態にあつたので救急隊員の人には私が病気のことも含めた彼女の状態について伝え、そのまま救急車にも同乗した。彼女は今は診療を受けに席を外しており、その間を見計らって院内にあつた公衆電話から結花に電話をかけた。後ろで待っている人もいなかったので、誰にも会話を聞かれる心配が無い分辺りをはばかりるような気持ちは薄れた。結花もあれからずっと連絡を待ち続けていたのだろう、私の声だと分かると彼女は私が名乗るのも待たずに『藤崎さんが見つかったんだね!』と訊ねてきた。

「そう。なんだけど、それだけじゃなくてね。話せば長くなるけど、青空がちよつとした

事故に遭っちゃって、今は病院にいるんだ」

「事故?! いったい何があつたの? いや、それよりも、藤崎さんは無事なんだよね?」

「アパートの二階の柵が壊れてそのまま青空も一緒に落ちたんだ。まだ結果は出てはいないけど、激しい出血はしていないし、意識もあるからたぶんそれほど酷いことにはならないと思う」

「そう、なんだ。よかつた。ずっと音沙汰が無かつたから、心配で心配で。とりあえず、命に関わるようなことにはなっていないようだから本当によかつたよ」

受話器の向こうで彼女が息を漏らすのが聴こえた。そうなつてくると次に気になつてくるのは当然、青空がいなくなつてしまつた理由だろう。私もここに来るまでの道中や待合室でも自分なりに考えてみたが終始分からないことだらけだつた。

「それにしても、藤崎さんはどうしてこんなことをしたんだろうね。何か思い当たる節はある?」

「それが、私にも分からないんだ。腕を怪我したみたいで今は筆談することもできないし、こればかりは確かめる術が無いよ」

詳しいことは分からないけれど、今日の一件は青空にも思う所があつたことだろう。きつと私の行いもその一端を負つているはずだ。そんな私に彼女を聞いたはず資格など無いのではないだろうか。全てが昔のことになつて、青空が全てを話してくれる

まで待つのではないだろうか。

「だけど、このことはきつと、青空にとつてはあまり触れられたくないことだと思っただ」

「そう。そういうことなら、私達の方からもなるべく話題に挙げないようにしようか」  
「そうしてくれると助かるよ。それとね、結花に一つ頼みたいことがあるんだけど、明日と明後日つて空いているかな？」

「土曜日と日曜日？たしか何も予定は無かつたはずだと思っけど、それがどうかしたの？」

「居合わせた現場で見た限りだと、おそらく青空の右腕が折れているみたいなんだ。誰かの助けが必要なんだけど、私は日曜日に法事があるからその移動の為に明日の午後には家を出ないといけないの。だから結花には私がいけない間、青空を助けてあげてほしいんだ」

利き腕が使えないとなると日常生活の様々な場面で支障が出ることだろう。事情が事情でなければ私もここに留まっていたかつたし、そうするべきだった。結花は『予定を確認してくる』と言って保留もせずに受話器から離れた。それから少しの間だけ忙しいような足音が行き来して、すぐに『その日なら大丈夫だよ』という声が聞こえてきた。  
「ありがとう。結花には、このこと以外にも色々謝らないといけないね。今日のこと



はきつと、青空だけじゃなくて、私も何かを間違えていたんだと思うんだ。だから、ごめん」

「…どうして私に謝るの？私だって、いっぱい、いっぱい間違えてきたのに。そんなの、自分勝手だよ」

彼女の声は穏やかなままだった。それでいて矢のように鋭く尖っていて、少しばかり震えていた。その濁った声の中心にあるものを私はまた探し当てられなかった。分かったことはただ一つ、私はたった今、また石を取りこぼしたのだということ。たったのそれだけだった。

「ごめん。今のは聞かなかったことにして。やっぱり、二人とも似た者どうしだな、つて。とにかく、私は怒っていないから。藤崎さんにそう伝えておいて。それじゃあ、また」

こちらが何か一言すら返す間も無いままに電話は無造作に切られた。物言わぬ私の傍らでは緑色の受話器だけが人には持ちえない空っぽで甲高い音を投げかけ続けている。大きな間違いとたくさんの分からないこと達が、今日もこの掌に積まれていく。

病院を出てここまで帰ってきた時には雨はもう降り止んでいた。その頃にはもうビーフシチューはすっかり冷めていた。検査の結果、青空の右腕の骨は二つに折れてしまったもののそれ以外の箇所の損傷はそこまで酷くはなかったので、病院でギプスを巻いて

もらうだけで入院の必要は無かった。

「ビーフシチューを作っておいたんだ。かなり遅くなっただけど夕飯にしようか。それとも先にお風呂の方がいいかな？」

彼女が首を横に降ったのでつまみをひねって鍋を温め直した。こういう時に作り置きという物はない。それにこれなら青空も左手だけでも食べられるだろう。本来はこの為の物ではなかったけれど、家を出る前に作っておいてよかった。ダイニングルームからはどこか気だるげなテレビの音が聴こえている。時間帯からしてバラエティー番組の類だろう。普段の彼女であれば今の頃合ならあそこか自室で小説でも読んでいるのだろうが、あの手ではそれもできないようだ。あのような騒がしい音はかえって静寂を引き立てているようで私はどこも無く好きにはなれなかった。

事故が起こったあの時、私もその場に居合わせる事ができて本当によかった。レールを片手で回しながら考える。もしも私が来るよりも早く青空が病院に運ばれていたら、あるいはそれがあのメールを受け取るよりも前だったとしたら、きっと私は今もまだ彼女を探し回っていただろう。

「…それで、何がよかったのかな」

どろりとした軽い抵抗がレールの柄を伝う。私がいたからといって事故が防げた訳でもないし、青空の痛みを取り除くことができたなんてことも無かった。私は何もで

きなかった。だから、今の私も、こんな顔をしているのだ。青空が見つかってよかった、入れ違いにならなくてよかった、大事には至らなくてよかった。いったい誰がどう『よかった』のだろう。青空は辛そうな顔をしていて、私は何一つできず、結花とはすれ違いを起こしてしまった。本当にこれで『よかった』というのなら、どうして皆が笑顔でいられないのだろう。知らない内に鍋はぼこぼこ音を立てながら気泡を浮かべていて、私は慌てて火を止めた。

数ある日々の動作の中でも、右腕を固定していることの不便さが特に顕著に現れたものの一つが食事だった。利き手でもない左手で扱える食器となると限られていて、必然的に箸の代わりにスプーンやフォークなどを使わざるをえなかった。青空は先程から慣れない手つきでゆっくりとスプーンを口元に運んでいるが、その何度かに一度くらいの間隔で敷物の上に点々と染みが散らばった。これから数週間くらいはなるべく楽に食べられそうな料理を作った方がよさそうだった。

「大丈夫？ 私が食べさせようか？」

私の手を煩わせたくなかったのか、青空はその言葉に対して二回、少しして私が『無理しなくてもいいからね』と言うと更にもう二回首を横に振ってそれと同じ分だけ染みを作っていていき、その後もその数を増やし続けた。私が食べ終えて食器を運んだ後もそれは止まっていなかった。見かねてもう一度同じ言葉を繰り返してみたが、彼女の返事は

変わらなかつた。

遅い夕食を終えて一段落した頃には時計の針はもう既に夜の九時を通り過ぎていた。青空は自室へは戻らずにダイニングで一緒にニュース番組を見ている。テレビではアウンサーが淡々と今日の出来事を話している。白いはずの壁がそこはかとなく青みがかつて見える。普段と何も変わらないはずの部屋が不思議といつてもよみもずつと静かに感じた。私は他の物に目を向けられなくて、彼女と同じようにテレビに映る機械的な口の動きを眺めいるのだった。

「お風呂、どうしようか」

画面から視線を外して青空へと向ける。それに連なるように彼女もそうした。どうしようか、というのは別にまだ湯を沸かしていないなどということではない。医者からはなるべく血行を良くしないようにと言われたため、青空を風呂に入れられないのだ。また、ギプスを濡らしてはいけない上に水を防ぐ為の何か知らを巻こうにも本人が痛がるので、シャワーを浴びさせることもできなかった。

「せめて体を拭くくらいはした方がよいよね。一人でもできそう？」

青空は重たげに頷くと鈍重な動きで腰を上げ、ピンチハンガーからタオルを一枚取って自室へと戻っていった。耳をそばだてて向こうで扉が閉まる音をしっかりと聴いてから、充電していた携帯電話を手繰り寄せる。メールの作成の項目を開いてリストの上

から二番目にある結花のアドレスを選択した。先程のやり取りの事もあつて電話をかける気にはなれなかつた。

『夜遅くにごめんね。さつき病院から帰つてきたから、その結果を結花にも伝えておきたくて。先に結果を言つと、他の箇所は打ち身くらいの軽傷で済んだみただけ、やつぱり右腕の方は折れていたみたい。医者のお話では五週間くらいはずつと固定していなければいけないらしいから、今回だけに限らずにしばらくの間はまたこういうことをお願いするかもしれない。私もできる限り青空から離れないようにするけど、どうしても学校の方でも結花に頼らなきゃいけない時がきつとあると思う。いつも結花に押しつけてしまつてばかりで悪いけど、その時はどうか助けてあげて』

送信のボタンに添えた親指が二の足を踏む。ろくに読んでもいないのに本文に繰り返し目を通してからやつと押すことができた。何かの用事で手が離せないのか、それともまだ返事を書いている途中なのか、しばらく待つてみても結花からの返信は無かつた。三、四回くらい受信トレイが空であることを確認してから、私は後ろめたさを抱えながらそそくさと廊下へ出た。何かしらの用がある訳ではなかつた。意味は無くても、ただこの場から逃れたかつたのだつた。

私の足は玄関にたどり着く前に青空の部屋の扉の手前で停止した。足の裏に冷たい何かが触れて下を見ると、そこから洗面所までの狭い区間に水滴の破線が引かれてい

た。彼女の名を呼びながら指の背で扉を軽く弾く。

「入ってもいい？ やつぱり一人では大変だろうから、何か手伝えないかなと思って。嫌なら一回、いいなら二回ノックしてほしいな」

何も音はしなかった。鍵の無い扉の隙間からは冷たい光が漏れていた。そのまま少し時間が経つて、私がおずおすと再び彼女に呼びかけるとすぐに向こうから床を叩く音が二度聴こえた。その音はどこか投げやりに扉の向こうまで放られて、がらんとした廊下を抜けていった。

ドアノブは雨に降られたみたい濡れていた。柄の無いカーペットの上に点々と連なる染みの先には上裸になった青空が背を向けて座っていた。彼女はこちらには一瞥もくれようとはせずに、無造作に両袖の揃っていない服を掴んで胸元を隠した。その左隣には水の飛び散った風呂桶とずぶ濡れになったままのタオルが置いてあった。

「痛みはどう？ 腫れは収まってきた？」

先程の出来事を引きずっているのだろうか、私が彼女の後ろに座つてもまだその態度に変化は無かった。別に青空が何か言った訳ではないけれど、だからこそ彼女が纏う空気がそんな風に示している気がした。床のタオルに手を伸ばす。水を吸ったタオルはずつしりと重くて、軽く絞った途端に桶の水かきが増した。

「やつぱり。青空はもう少し私を頼ってほしいよ。せめてこんな時ぐらいいはさ」

彼女の小さな肩にタオルをあてがって山脈のように並んで見える骨ばったその稜線をなぞっていく。布越しに彼女の肩甲骨の溝や脊椎のごつごつとした起伏が伝わってきた。色白で華奢な、弱々しい背中だった。腹の面から地面に落ちたおかげなのか、やり場の無さそうに佇むその背中は傷も無く綺麗なままだった。

「今日の事、私も結花も、青空を責めるつもりなんて無いよ。迷惑だなんて、誰も全く思っていないから。私達はね、青空の力になりたいんだよ」

両の掌が微小に震える。表情の見えない彼女の背にわずかに力がこもったのが分かった。その言葉に呼応するように布と布とが擦れ合う音がした。握りしめられた生地が皺を作る音さえも、私の耳には聴こえていた。

「……どうして」

私の体はたぶん、指の一本一本の先に至るまで一寸たりとも動いていなかったと思う。正確に表すと、ほんの一瞬だけ自分の体の動かし方を忘れていた、というような感覚だった。今、私の鼓膜を震わせたその声は私の喉を通して出たものではなかった。

私の心の内に真つ先にやって来たのは感動や喜びといった綺麗な感情ではなく、ただの驚きだけだった。最初に自分の耳を疑った。それを内なる自分が奏でた慰めの音だと思つた。しかし、両腕を渡っていった微かな振動はそれが疑う余地の無い確固たる現実であることを如実に証明していた。たった今、青空は確かに喋った。私に向けて声を

発したのだ。けれど、私の胸に何か他の感情が訪れるよりも早く、そして私の頭がその出来事を咀嚼する間も無いままに青空は次の言葉をついだ。

「どうして、有理奈はここまでしてくれるの？ 私が怪我をしているから？ それとも私が病気だから？ ねえ、そんなに私はかわいそうなの？ 喋れないことが、怪我をしていることが、『ふつう』の人よりも足りないことが。もう、そういうのはやめてよ。同情なんて、いらぬよ。私だって有理奈や結花と変わらずに悲しんだり、怒ったり、喜んだりするんだよ。ただ、それが口でできないというだけで、皆は私をかわいそうな人にするんだ。皆が優しさを向ける度にそれを受け入れられない自分が醜く見えて、嫌いになるんだ。私はもうそれに耐えられなくなって、だから、ここを出ていったんだよ。私はただ、『ふつう』でいたかったんだ。有理奈や結花と同じことで笑って、そして一緒に悩んだりしたかった。二人と同じ世界にいたかっただけだった。同情してほしいだなんて、私はただの一度も望んでなんかいないのに。それなのに……もう、これ以上、私を苦しめないで」

青空の喉と唇からはまるで堰を切ったみたい言葉が溢れ出した。それは彼女がずっと声にすることができなかった、そして私が今まで目を背け続けてきたもの達すべてだった。声の端々が歪み、その途中で幾度となく途切れながらも、それでもその声は怒涛のように流れ続けた。



「ほら。私、喋ったよ。話せるようになったよ。これで皆と同じ『ふつう』になった。嬉しいも、苦しいも、ぜんぶ言える。藤崎青空はここにいるよ。だから、もう…」

「違う。違うよ」

気付けば自ずと彼女の言葉を遮っていた。言葉が意図せずに口から飛び出したような感覚だった。タオルから滴り落ちた水の軌跡が青空の背筋と重なる。まるで海の底に落とされた錨のような、そんな気持ちが自分が放った言葉が耳に入ってくる頃には胸の奥に居座っていた。

「それは、青空が私にとって大切な存在だからだよ。だから、できるだけ辛い思いはさせたくないし、悲しませたくもない。その為に私にできることがあるのなら、全てやりたくない。青空には笑っていてほしいんだ。病気だとか怪我だとか、そんなことが心配なんじゃないよ。自分にまで嘘をついて、誰の前でも平気な顔をして、なんでも自分一人のせいにしてしまう。そんな青空が心配なんだよ。人への頼り方を忘れてしまった、そんな青空が心配なんだよ」

怒りとも悲しみとも似つかない、どこにも名前の載っていない何かが声帯の震えに伴う。彼女に対してこんなにも感情的になるなんてこれが初めてのことだった。青空は私の言葉を聞き終えるまですつと、花火が打ち上がる前のように口を閉ざしていた。

「…有理奈だつてそうじゃない。自分ではどうしようも無いことまで全部抱え込んで、

誰にも迷惑をかけないようにしているんだ。お祭りの夜だつてそうだった。有理奈は私を蚊帳の外に追いやった」

「それは、青空に心配をかけたくなかったから…」

「それのどこが私と違うというの？ 有理奈は自分だけが頑張れば全てをどうにかできるつて思っているんだ。私の苦しみすらも自分一人で肩代わりできると、そう思っているんだ。そんなはずも無いの。私は、有理奈のそういう所が、本当に…嫌なんだよ」

青空はそう言い終えてから頭を垂らした。これでもう、この部屋の中を行き交う言葉は何も無くなった。『やつぱり、二人とも似た者どうしだな、つて』。結花が呟いた言葉が耳の奥で蘇る。また、すれ違いだ。自分が過ちを犯したことに気付くのはいつも誰かに教えてもらつてからだ。

「……………後はもう、一人でできるよ。背中、拭いてくれてありがとう…ごめんなさい」

そう言つて立ち上がろうとする青空を引き留めろみたいなのに、私はいつの間にか彼女の背中に顔を埋めていた。ここでまた一歩も踏み出せなかったなら、次なんて都合の良いものはきつと無い。まるで既にそうなることを誰かに教えられているような、そんな確信めいた思いに駆られていた。

「私に…私に何か、できることは無いの？ どんなことでもいいから…やつと再会できたのに、またひとりぼっちになるなんて、そんなの、嫌だよ」

ぴたりと重ねた額から、この間とは違う彼女の体温が伝わってくる。私の手の中にあったのは濡れたタオルではなくて、あの夜に私の右手に握られていた十円硬貨だった。優越感も善悪も、何もかもをかなぐり捨てたまっさらな私がそこにいた。私はもう、何もこの手の上から取り零したくはなかった。私はこの時、初めて青空と同じ世界に立っていた。

「…去年の夏、花火を買ったんだ。お祭りには行けなかったから、せめてと思つて。その時は楽しみに思つていただけで、結局やらすじまいだった。だからさ。今夜、一緒にやろうよ」

彼女の声は澄んだどめ色をしていた。青空は私が何も言わない内に服の袖を通し始めた。閉ざされたままの窓に目を向けると、黒色とも青色とも表せないベールのかった夜空が広がっていた。

河川敷には誰もいなかった。ここに至るまでの道中、私達は何も言葉を交わさなかった。青空が喋ることができるのは二人きりになった時だけだった。これで彼女の病気が治つたなどということは無く、人の往来のある場所に出るとこれまで通りに戻つてしまった。

青草と雨上がりの匂いが混じり合つて、辺りはむせ返るような香気に包まれていた。バケツの中に入れたろうそくや点火棒が歩く度にがらんがらんと音を立てる。その音

は青空の左手に握られた花火の袋を連れ立って草の薄い橋の影へと消えていった。

「はいはい、さようね」

青空の声がコンクリートの橋脚に反響する。そこは街灯にも照らされないような真つ暗な空間だった。砂利の上に置いたバケツから手を離すとその輪郭はもうぼんやりと霞んで消えていった。手探りでろうそくを取り出して火を灯す。今夜は風が無いので、灯は少しばかりたなびいたりしながらも消えることは無かった。

「言い出したのは私なのに、何から何までごめんね。この右腕が使えないばかりに」  
「いいよ。仕方の無いことだもの」

青空の顔も見れないままひどく乾いた返事をする。橋の足元が暮れの空のような黄色に染まっていた。川の流れの傍まで歩いてしゃがみ込む。水面に浅く沈めたバケツから伝わってくる緩やかな水の抵抗が心地良かった。ここにはもう一つの星の無い空が泳いでいた。

「その、さつきはごめんなさい。青空の気持ちも考えないで、勝手に動いて空回りばかりして。青空が苦しんでいたことにも気付けずに、いや、気付こうともせずに……」

「違うよ。謝るのは私の方だよ。病気を治したいのに上手くいかなくて、私は焦っていたんだ。これまで通りにすればいいだけなのに、自分の気持ちを一つ変えるだけなのに、つて。さつき言ったことは全部、ただの当てつけなんだよ。全部私の為を思つての

ことだったのに、私はそれを口実にして憂き晴らしをただけなんだ」

そう言って俯いた彼女の声は寂しげな響きを引き連れて宵の奥へと紛れていった。同情か憐憫か、何かそれがそれを否定しようとしてり上がって来たけれど、私はそれを押し留めて飲み干した。それは傷付くことを避け、臆げに投影された自分の影から目を背けたいが為に使ってきた常套句だった。私が話したいことはそんなガラス玉のような言葉などではなかった。

「私は、これでよかったと思う。もしあのままの生活を続けていれば、きっとお互いに本音で話し合うことなんて無かったはずだから。あれが最善手だったとは思えないけれど、間違いではなかったと、そう思うよ」

「…そう、なのかな」

溶けたろうの上に燃える小さな火がその周囲に影を作り出す。ろうそくを囲う私達の姿は一つの黒い塊となって天井に投げかけられていた。横目に覗いた彼女の表情はか細くてしたたかな明かりに柔らかく照らされていた。

それから合図も無いままに私達は手持ち花火に火を点けた。流れ星みたい煌めくわずかな瞬間を見つめて、それが終われば水に浸した。この町の誰にも見向きもされない一角で、まるで映画のワンシーンを巻き戻すように私達は何度もそれを繰り返した。青空も私も何も言葉を発さなかった。私の心と体に染みついたいつもの静寂と

は違う、雪の下を溶け出していく澄んだ流れのような静けさがあった。私にはそれがひどく懐かしく、そして心地良かった。

「…本当に、有理奈は私とそっくりだよ。昔からずっと。自分に優しくできない所も、意気地無しな所も、後悔してばかりいる所も」

何本目かの線香花火の灯が水の冠を戴いた頃、青空はそれを掬い上げるように話しました。人差し指と親指の間から釣り下がった小さな夕焼けがまた一つ、じゅつと鳴いてバケツの底に沈んだ。ろうそくの背丈は随分と低くなっていた。

「私もそう。私達が進路を決めた時、本心では有理奈もあの町に残ってほしかったんだ。だけど、私一人の気持ちで引き留めてはいけないからって見なかった振りをして、最後までそれを言わなかった。それが現実から目を背ける為の方便だったことに気が付いたのは、有理奈がずっと遠くまで行っちゃってからのことだった。高校生になってから三年間、一日たりともそれを悔やまなかった日は無かったよ。有理奈がどこへ行ったのかは知っていたのに、いつまでも聞こえの良い言い訳を作り上げてばかりで、とうとう高校生活の中であの町の外へ出ることは無かった。私は一人きりになってやつと自分が犯した過ちを、そしてその痛みを知ったんだ。それでようやく有理奈と、いや、意気地無しの自分と向き合う決心がついたの…本当は、あの大学以外はどこも受験してないんだ。確かに学費のことだつて無くはなかったけれど、あの学校を選んだ一番の理由

は有理奈とまた話がしたかったからなんだよ」

青空はそこまで話して一度言葉を切った。途端に川のせせらぎがうるさいくらいにその空白を埋めていく。それと時を同じくして頭の上を時刻表には無い電車が通過していった。その音が止んだ頃、彼女は小さく息を吸ってこちらに向き直った。

「私が会いに行こうとしなかったのはね、怖かったからなんだ。もう一度有理奈に会って『あの約束を覚えている？』なんて訊いた時に、『そんなこともあったね』って返されるのが。あの日のことが思い出になってしまうのが恐ろしかったんだ」

結花の言った通り、やはり青空と私は『似た者どうし』だった。もう手の届かないものから目を離すことができなくて、ずっとそこから進めないでいた。あの日の面影を探してばかりで、比べるものなど無いはずの今と向き合い切れずにいたのだ。一つの同じ線を二つに区切ってしまったのは、私も青空も同じだった。

「…私は、覚えていたよ。忘れたことなんて一度だって無かった。あの夜から今日まで、ずっと。だけど、思っていたものとは違う形ではあるけれど、あの約束はもう果たされた」

けれど、今は違う。私達は変わっていくのだ。たくさん間違いとすれ違いがあつて、今は前を向いている。これまでよりもほんの少しだけ。だからもう、きつと迷わない。何度だって見つけ出してみせる。私達はもうひとりぼっちじゃなくなつたから。

「だからさ、青空。いつか、あのアパートを引越して二人で部屋を借りようよ。一人用じゃなくて二人用の部屋を。あの頃を取り戻すんじゃないかって、もう一度やり直すんだよ。それが、新しい約束」

「…うん。約束」

橋の下を風が吹いていき、最後の火花がバケツの底に沈んだ。揺れる真つ黒な水鏡の上に見えた彼女の口角は緩んでいた。風の行く先に目をやると誰かが忘れて帰ったのだろう、大人用のサンダルが一足、草むらの陰からこちらに手を振るように落ちていた。

よく晴れた朝と昼の境目、いつもよりも遅い目覚めを傍らに夢見心地でいると眠気を覚ますような冷たさはもうここには残っていないかった。ぼんやりとした意識の中で眺めたコルクボードのカレンダーはまだ五月のままで止まっていた。壁にかけた時計を見ると出発は午後からなのでまだ時間はあるものの、少しばかり寝すぎてしまったようだった。

そろそろ準備をしなければ。そう思いながら布団を畳んで部屋を出る。一人で暮らしていた頃は寝室に造られたクローゼットを使っていたのだが、青空と暮らすようになってからは廊下にある物置に自分の衣類をしまっている。生来衣服に頓着する性分ではなかったので特段困りはしていないが、やはりこの部屋では二人で住むには狭すぎ



るといふ印象はあつた。

廊下の中程にある物置の奥からトランクケースを引きずり出して衣類や下着を詰め込んでいく。法要の為の道具を一揃い入れ終えた後で、喪服だけは皺がでないようにとクローゼットに吊るしてあつたのを思い出した。玄関の方に目をやるとドアのチエーンロックはかかつたままだつた。

そつと扉を開け、足音を忍ばせながら部屋に入ると青空はまだ眠つたままだつた。いつもは彼女の方が早起きであるだけに、こうして寝息を立てている彼女の姿は少しばかり珍しかった。起こさないように静かに用を済ませてこの部屋を後にしようとする、後方から衣擦れの音と共に小さな唸り声が聴こえた。

「有理奈…おはよう」

まだまどろみをたゆたつていくぐもつた声にどこか感慨に近いものが込み上がる。湧いて出てくる色んな言葉を飲み込んで、私はただ『おはよう』とだけ返した。その返事を耳にして青空は嬉しそうに、そしてどこか気恥ずかしそうに目尻を解いてもう一度『おはよう』と言つた。

「起こしちゃつてごめんね。明日の法要で着る服を取りに来たんだけ」

「もうそんな時間なんだ。今日はいつてもよりもいっぱい寝ちゃつたな」

「まだ昼前だよ。準備を済ませたらお昼ご飯を食べて、しばらくしてから行くつもり」

まるでこれまでのことなど無かったみたいだに青空と私は言葉を交わしていた。今見ているものが甘くて優しい夢なのか、それとも昨日までの全てが悪い夢だったのか。この目の前の景色がそのどちらかだったとしても、私は現実であつてほしい。そんな蒙昧な思いがよぎったのは私がまだ夢の影法師を踏んでいるからなのだろうか。

「私もそろそろ起きなきゃね。」飯は有無奈が作つてくれているんだっけ」

青空がゆつくりと上体を起こす。いつも通りにベッドから出ようとして彼女は眉間に皺を作つた。その右目は絞られたまま慎重な動きで布団をめくつて立ち上がった。その一連の動作において、彼女は至る所で右腕をかばつていた。

「大丈夫？ やつぱりまだ痛むの？」

「昨日よりはだいたいぶ楽になつたよ。まだ痛みは引いていないけど、これくらいならそこまで支障は無いと思う……だからね、私も一緒に行けないかな」

青空が右腕をさすりながら言う。多少は驚きはしたものの、どこかで彼女がそう言うような気はしていた。彼女が同行すること自体には何も差し支えは無かつたが、ギプスの下から覗く痣は未だ引いていない上に指先もなんだか腫れているようで、医療や看護の道に明るい訳ではないけれどこんな様子ではまだ安静にしていた方が良いでしょうに思えた。

「それは別に構わないけれど、本当に大丈夫なの？ あれから一晩経つただけなんだから、

あまり無理をしてはいけないよ」

口ではそう言ってみても本心ではまだどうすればよいのか決めかねていた。彼女の願いを叶えたいけれど、こんな状態で連れ回してしまつては怪我の治りに良くないのではないか。揺らめく思考の水面の上に、結花のことや冷蔵庫に入れたビーフシチューのことなど、雑然としたことが乱反射するようにちらついては消えていった。

「お願い。なるべく有理奈の邪魔にはならないようにするから、迷惑をかけないようにするから：私も、あつちに用があるんだ」

胸の底から押し出すように青空はその言葉を放った。その様相が彼女の言った用という言葉の意味を言外に裏打ちしていた。懇願するように見上げるその顔には固く結ばれた意思が秘められていた。

青空が荷造りをしている間に結花に電話をかけた。昨日の申し入れを取り下げる旨と、青空が話せるようになったことを伝える為だった。メールで済ませてもよかつたのだが、結花にはどうしてもこの口から出た言葉で伝えなければならなかつた。

「有理奈。そろそろ出発するんだね。私の方もちようどこれから向かおうとしていた所だつたんだよ」

電話口の結花はいつものままだった。昨日のこともあつて少し気負いしていたが、向こうもそれを払拭させようと努めてそうしているのだろう。彼女には忘れてほしいと

言われたけれど、どうにもあの言葉が記憶から拭い切れなかった。

「昨日は返信が遅れちゃってごめんね。さつきメールを読んだよ。一ヶ月以上も利き腕が使えないなんて大変だね。私にできることがあったら何でも言っただけ」

「そのことなんだけど、さつき二人で話し合っただけ。向こうには青空と二人で行くことになったの。だから、結花には悪いけど今日はもういいんだ」

「そんな。謝らないでよ。元々今週末は何も予定を入れていなかったから、気にしないで。連絡してくれてありがとう。また何かあったら遠慮無く私を頼ってね」

「ちよつと待つて。それだけじゃなくてね、実はもう一つ、結花に伝えておかないといけないことがあるんだ」

言葉の端々から雰囲気伝わってきたのだろう、結花はきつと口を閉ざして私の言葉を守った。それ自体はほんの少しの間のことだったが、そこで一気に私達の間にびんと張り切った空気が流れ込んだ。今から口にするのは喜ばしいことであるはずなのにどうしても胃が揺さぶられるような思いが拭えなかった。

「昨日の夜、青空が喋ったんだ。まだ上手く声が出せないようだったけど、やつと話してくれたんだよ。こうして青空が一步を踏み出せたのも、結花が手伝ってくれたおかげだと思う。ありがとう」

それが昨日の言葉に対する私の返答だった。そしてそれは結花と青空が気付かせて

くれたことであり、他人への頼り方を忘れてしまった私の出した答えだった。私と青空と結花と、その誰かが一人でも欠けていれば導くことができなかつた答えだった。

「そっか。よかつた。本当によかつたよ」

瞬きをするくらいの間があつて、そこで初めて彼女の声が震えた。その声はただの歓びというよりは祝福の色を帯びて私の耳に届いた。正や負などには属さない、どんな尺度でも測れない透明な色をした心が受話器の向こうからなだれ込んできた。

「正直に言うとな。藤崎さんが私の部屋を訪ねてくるようになってから、どんどん有理奈を羨ましく思うようになったんだ。藤崎さんと一緒に過ごしてきた有理奈を。二人には私には見えないものが見えているみたいで、私にはそれが見えなくて。まるで有理奈と藤崎さんだけがこの世界とは違う所に住んでいるみたいだった。二人のいる場所まで行くこうとしてもどうしても二人には届かなくて、手を伸ばした先に二人はいなくて、この手が掴んだのは焦りと疎外感だけだった。そのせいで、昨日は有理奈に八つ当たりしちやつたんだ。あの時の私には、自分が仲間外れにされているように感じられたんだ。有理奈がそんな風に思っているはずが無いのに。電話ではあんな風に言ったのに、私こそ自分勝手だった。だけど、こんな私でも誰かの役に立てていた。こんな私を必要としてくれる人がいた。だから、私は私を受け入れられる気がする。まだここは二人と同じ世界ではないけれど、私は私にできることをやるよ。私の方こそ、ありが

とう」

自分の中だけに存在していたはずの霧のかかった感覚が受話器を通じて確かなものになっていくような感だった。『ありがとう』。そう言った彼女の顔はここから見えることは無いけれど、きつと結花は笑ってはいなかった。でなければ、どうしてこんなにもがらんどうな声をしているというのだろう。こんなまるでどこかに大きな穴が空いたような声を。

視界の端の窓を一匹の白い蝶が過ぎて行つた。結花はあの頃の私によく似ていた。誰にも本当の気持ち打ち明けられずにこの町の片隅でひとりぼっちでいた、あの頃の私に。

「…私の父が死んだ時。母はひどく泣いていたんだ。だけど、私は泣かなかつた。父とは昔からずつと折り合いが悪かつたからね。あの人との記憶に思い出なんてものはたつたの一つだつて無かつた。だから、私は泣かなかつた。私も母と同じ『家族』だつたはずなのに、私だけが泣けなかつた。明日また母に会うことになるけれど、どうしてあの時泣いていたのかなんてきつと分からないと思う。つまりね、違う世界なんてものはどこにも無いんだよ。どれだけその人と同じ空間で過ごしていたとしても、それだけで心が通じ合うはずなんて無いのだから。私達だつてそう。昨日、青空が出て行つたのはね、私達が『ふつう』の扱いをしていなかったせいなんだ。青空がそう話してくれた。

ほんとうの青空は私達の目に映っていた青空とは違って、私達の気持ちもまた私達  
が思っていたものとは違う受け取られ方をしていた。結局の所、私達は同じ世界にいた  
はずなのに、同じものが見えていなかったんだ」

日の当たらないペランダに出るとそこは穏やかな町の喧騒で溢れ返っていた。この  
時間帯では眼下の道を歩いていく人の姿はまばらで、紺や橙色の屋根の波間に隠れた国  
道では両手で数えられるくらいの車がゆつくりと行き交っていた。この町のどこか、小  
さな片隅で私達は生きている。生きていく。

「けれど、私の家族とは一っだけ違う所がある。私達は同じものを見ようとしている。  
時にはそのせいでたくさん傷を負ったり、過ちを犯したりすることもあるけれど、そ  
れでも私達は同じものを見ようとしている。できるかどうかじゃなくて、そうしようと  
することそのものが一番大切だったんだ。だから、私達は分かり合えるはずだよ。今日  
や明日じゃなくても、そう遠くない内に」

「…きつといつか、そんな日が来るのかな」

「ねえ有理奈。ちよつと来てくれない？ 柵の奥に取り出せない物があつて」

廊下の奥から私を呼ぶ声が聞こえて振り返ると青空が自室から顔だけを覗かせてい  
た。その声はきつと彼女にも届いていたのだろう、見えるはずの無い結花の表情が崩れ  
たような気がした。

「分かった、すぐに向かうよ。ごめんね。青空に呼ばれたからもう切るよ。それとね。きつと来るよ。いつか、必ず。またね」

住宅街を抜けてきた涼やかな風が髪を撫でていく。『またね』と返す結花の声は先程よりも柔らかかった。鍵をかけようともう一度窓の方へ向き直ると、向かいの生垣の辺りを十二枚の真つ白な翅が飛び回っていた。

白線の内側で二枚の乗車切符を手に発車時刻を待つ。電光掲示板に目をやると時刻はもうじき午後の一時にさしかかろうとしていた。いくら今が昼食時であるとはいってもさすがに前とは違ってホームには私達以外の人の姿もちらほらと見えた。

『わがままを言つてごめんね。こんな時でもないときつと行ける気がしなくて。』

『別にいいよ。こんな長い道のり、話し相手がいないと退屈で仕方が無いもの。』

ホームに立っている間は互いにごく短いメールのやり取りで会話をしていた。携帯電話を触っているどこにでもいるような二人、あるいは一人と一人。私達はきつとそこにいた人々の目にはそう映っているのだろう。青空が文字を打った画面を見せて、私がそれに応えることだつてできた。そのはずだったのに、私達はどちらかが言い出した訳でもなく自ずとそうしていた。

『私が話せるのは充電が続く内だけ。これが切れたら私はもう口も利けなくなる。そうなつたらもう私は何もできなくなるよ。』



『それでもいいんだ。言葉で伝わることだけが全てじゃない。言葉にはできない言葉だつてたくさんあるよ。それに、私だつて一人きりは怖いんだ』

携帯電話の充電などおそらく道の半ばにもいかない所で無くなつてしまふだろう。別に私はそれでもよかつた。彼女が隣に居るだけで胸の奥に居着いた不安が小さくなる気がしたから。彼女がどうして同行したのかは未だに訊けないでいたけれど、青空もきつと同じような心持ちだつた。

『これが終わつたらまた元の生活に戻れるんだよね？』

『戻るよ。私はそう信じたい』

『私も。有理奈と結花と私と、皆にとつて、そうなることを願っているよ。』

雨の匂いがして視線を画面から外すとホームに入ってきた子供連れの母親がこちらをちらりと見た。そして瞬きをするくらいの間だけ青空を視界に据えた後ですぐに興味無さげに視線を離してベンチに座つた。ここにいる人のほとんどがそうだつた。三角巾を吊り下げた彼女をまるで品定めするみたいに一瞥してから、景色の一部として認識して点字ブロックの内側を行くのだつた。

『車が欲しいね。』

列車の到着を知らせるアナウンスが辺りに流れる。それは私達が乗る列車ではなかつた。誰も彼もが乗る人ばかりで、この町を訪れる人は誰もいなかった。ホームから

人が減った後で横目に隣を除いてみると、青空はまだ居心地の悪そうな顔をしていた。それから互いに知らない顔をしたまま声の無い会話は続いていった。ただ彼女に視線を向けることさえもこの場所でははばかられた。漠然と感じている言い様の無い後ろめたさが誰へのものなのか、私には判断できなかった。

道中では車内販売の物を買って少し早い夕食をとった。その頃にはもう日は沈み始めていて、見慣れない形をした地平線が茜色に染まっていた。ここには白色や緑色をした山の稜線なんてものは無く、あるのはでこぼことした人工的な輪郭ばかりだった。そのせいなのか、同じはずの夕日までもが違うものに見えた。

「本当にそれだけでよかったの？私の分も食べなよ」

向かいに座っている青空はぎこちない動作でサンドイッチを頬張りながら首を横に降った。今みたいに時々私が思い出したように喋りだして、青空がそれに対して相槌を打つ。四、五駅前くらいでどちらの携帯電話の電源も切れてからはずっとこの調子だった。それが終わると窓の外に目を向けて、また何か別の言葉が戸口を叩くのを待つのだった。

「こんなにも、こんなにも遠くまで来たんだね」

電柱と家々の群れの中にドーム状の屋根が見えて眩く。それは小学生低学年くらいの頃に遠足で訪れた場所だった。当時はひどく遠く感じたこの場所も水を一口飲んだ

間に視界から消えていた。私達はこんなにも速い乗り物に乗って移動していたらしい。列車が駅を通過していく度にひとり言の間隔は狭まっていた。

太陽がビルの森の中に隠れてわずかに暗がりができた。まるで出来ない鏡のように自分の顔がぼんやりと車窓に浮かぶ。その後ろに映る人々の中に景色を眺める姿は無かった。そこから少し瞳を動かすと青空と目が合った。青空も私と同じ目をしていた。

『だ』

青空が口を縦に開く。彼女はそのままゆっくりと口を動かして『い』『じょ』『う』『ぶ』と続ける。それから更に何かを言おうとした所で夕日がそれをかき消した。ズボンのポケットに手を入れて切符を確かめる。次の駅に到着するのはあと少し先のことだった。

駅舎を出るともうすっかり夜になっていた。人混みの中を力無く抜けていく風は蒸し暑さを覚えるくらいに生暖かく、あの町の冷たい風を恋しく思わせた。この辺りで暮らしていた頃はあまり寄りつきなかつた場所だったからか、あまり生まれ育った町に戻ってきたという実感が湧いてこなかつた。

通りは人や車や建物など、色んな物で溢れ返っていた。道を急ぐ人や車は私達のことなど見向きせずに見上げるような建物達の隙間を忙しなく行く。ここは私達の住む町とは何もかもが違った。

「やつと着いた。かれこれ半日程度は電車の中にいたのかな。移動するだけでもかなり疲れたよ」

「ちやうどそれくらいになるのかな。さて、と。夕飯も途中で済ませたし、服も洗わなくていいし、後はお風呂に入って寝るだけだね」

「何もやらなくていいっていうのは、なんだか落ち着かないな。こういう時ってどうすればいいのかな」

青空がベッドの横にキャリーケースを置いて三角巾を外す。カーテンを閉めようと彼女が近付いた窓には真つ暗な夜がとそこに散らばった光が敷き詰められていた。行きとは違ってよく晴れているのに、そこにあるはずの星達は皆人工の光にかき消されていた。この町では見えるものさえも違うようだった。

「そうだ。親に連絡をしておかないと。まだここに泊まることを知らせていなかった」  
ベッドの上に腰を下ろして鞆を漁る。本来ならばここから更にバスに乗る段取りだったが、私達はそうせずにそのまま近くのホテルへと向かった。今夜はここで泊まって、明日の朝ここから葬儀場まで向かうつもりだった。

それを最初に言い出したのは私だった。今の家の状況を考えるに、まさか青空をあの家泊まらせる訳にはいくまいと考えてのことだったが、それだけではなかった。父の死という事態に相対して自分だけが感じているものが違っていたのだ。その程度に差

こそあつても、明日私が向かう場所で顔を合わせるのはほとんどが父を偲んで集まった人達だ。母は特にそうだろう。しかし、私はそうなれなかった。あの場所は、あの家は、私がいていい所ではないように感じていた。

「ねえ。一つだけ、いいかな？」

「ああ、心配しないで。もちろん青空の名前は出さないから」

「違うの。そうじゃなくてね…その、有理奈はさ、自分のお母さんのことをどう思っているの？」

電源ボタンから指を離して携帯電話を閉じる。振り返ると青空は仰向けになつてどこにも無い一点を見つめていた。その後ろの遙か遠くでは電車のヘッドライトが慌ただしそうに橋の上を渡っていた。青空と同じように顔を上げてみても、私の目にはフロアライトに照らされた橙色の天井しか映っていなかった。

「ごめんなさい。今のは忘れて。私はただ、知りたかつたんだ。母親という存在が日に日に自分の中から抜け出ていくようで、それが私には恐ろしくて」

「…自分があの人のことを良く思つてはいないということとは理解しているけれど、それ以上はよく分からない。負い目があるのか、憎んでいるのか、恐れているのか。だけど、次に会うとすればその時は父の一周忌かな。その次は二周忌。きつとそうなるよ」

「そう、なんだ。どうしてなんだらうね。それを聞いた後でもまだ、私には有理奈のこと

が羨ましく思えてしまうんだ」

青空の手が視界の片隅で伸びていき、その動きに従って一輪の黒い花が天井に咲いた。それは風の無いこの部屋の中で微かに身を震わせていた。この花もきつと彼女には見えてはいないのだろう。彼女の声は飾り気の無いように装って柄の無い虚空を空回りしていった。

「いけないことだとは分かっているのだけれど、今でもたまに考えてしまうんだ。私と有理奈の人生が交換できたなら、どれだけよかったことだろう、って。無駄なことなのに。馬鹿みたいだよね」

青空の母親は遠い昔に出ていってもういない。片や私は、母親はいるけれど決して会いたくはない。もしも互いの立場が逆だったのなら、と。彼女にそう言わせてしまった全てのものに対して私は恨みを抱くことができなかった。恨みという感情を形作ることができなかった。過ぎ去っていった癒えない傷達が生ぬるいやり切れなさだけを残して喉の奥を引つ搔いた。

「私も、もしもこう生きられたなら、なんて考えることがあるよ。それが無駄なことだと分かっているけどね。私だって生きている父親が欲しい。仮に次があるとすれば、もう一度やり直したいよ。私は、ふつうの家族が欲しかったんだ……こんなこと、ずっと昔に諦めたと思っていた」

携帯電話を離してベッドの上に全身を放る。私は父と母の間に生まれた。それだけだ。それ以外に何も無かったから、私と私の両親は『家族』にはなれなかった。まるであの山脈に戴かれた雪のように、これから先もずっと変わることは無いと分かるくらい決定的に。単に血が繋がっていると戸籍上そうであるとか、そういうものではない何か足りなかったのだ。

「それでも、やっぱり夢見るんだ。あつたのかもしれない景色を。もう少しあの人の言葉に耳を傾けていたのなら、もし私があの家を出ていかなかったのなら。もつと父と話していたのなら、少しくらいは泣いてあげられたのかな。もしかしたら、皆が言うようにあの人はいい人で、本当は自分の親が死んだつていうのに涙の一つも流せなかった私の方がひどい人間だったのかもしれない。父や誰かのせいではなくて、全て私の歩み寄りが足りなかったからなのかもね。都合の良い考えかもしれないけど、私がそうなるように努力してさえいれば家族になれたのかな。なんて」

「確かに、そうなったのかもしれない。だけど、そうはならなかった。お母さんが帰ってくることなくして無いだろうし、有無奈のお父さんはもういない。どうしたつて変わることは無いんだ。ほんのわずかな間だけ痛みを誤魔化せたとしても、その後には『今』と虚しさが残るだけ。分かつてはいるのだけれど、ありもしないものと現実を見比べてばかりいると、辛くなってしまふよ」

かすれた彼女の声が胸の鼓動と重なる。もしもここにいるのがあの頃の私達であつたら、きつと私も彼女と同じようにそれぞれの境遇を嘆いていたのだろう。彼女の痛みに寄り添おうともせず、ただ同じ生傷を舐め合っていたのだろう。私もそう思つていたら。

「そう、過去を変えることはできないよ……だけどね、青空。私はこうも思うんだ。もしも人生に『もしも』があつて、そちら側の自分に会えたとしても、私は私にしかねないんだ、つて。例えばどんなに小さなことだとしても、何か一つでも違つていたらきつと今の自分にはなれなかつたんだ、つて。今の私達にしか、いや、不揃いな私達だからこそ得られたものがきつとあると思うんだ。だから、どちらの人生の方が良いとかじゃなくて、私はこの人生でよかつたと思つているよ」

視界から彼女の影が消えていく。その外で温かい何かの空気を含んだ音を連れながら右の掌に触れた。悲しみを溶かし込んだ花びらはすべて散つていた。青空も私も、もう上を向いてはいなかつた。青空はか細い笑みを浮かべた後で『そうだね』と呟いた。「私も、そう思うことにするよ。お母さんが出ていつてから、父さんは変わつてしまつた。そんな父さんの苦勞を少しでも減らしたくて、そして何よりも自分自身を騙したくて、私は『藤崎青空』の仮面を作りあげた。だけど次第に私ではない私に耐えられなくなって、最後には自分もろともそれを壊そうとしてしまつた。私は私なりに頑張つては



いたつもりだったけれど、そのせいで父さんとの距離は余計に遠くなった。その件で学校に居づらくなった私はこの場所に転校して、そこで有理奈が声をかけてくれたんだ。しだいに有理奈が私の部屋に来てくれるようになって、色んな話をして、お互いにとつてのたつた一人の理解者になった。そして中学三年生の夏の始め、初めて誰かにお腹の傷のことを話した。それから一度は離れてしまったけれど、今はこうして同じものを見ている。ひとりぼっちの私達だったからこそ、こうして出会うことができたんだ。だから、これでよかったのかもしれない」

青空の腕がフロアライトに伸びて室内を照らしていた明かりが消えた。瞳の裏には彼女の見せた表情がまだ残響のように焼き付いていた。絡み合わせた指の間を歩き交うそれぞれの体温がゆっくりと溶け出していき、やがて一つのものになっていく。重なった掌の上から彼女の体が強ばっているのが伝わってきた。

「ううん、やっぱり違う。私はこの人生で……有理奈に出会えて、本当によかったよ」

暖かい吐息が鼻先を撫でる。暗闇に消えかけた彼女の瞳に映る自分と目が合った気がした。唇の先で青空の名前を口にする。声の無い部屋の中で、二人の乱れた鼓動と衣擦れの音が満ちていた。

部屋の中に静けさが戻ったのは町がまどろみの中に沈み始めた頃だった。町の息遣いはかなり前から聴こえてこなくなつた。カーテンの隙間から漏れていた作り物の明

かりは時間の経過と並んで弱くなっている。窓を閉めたままの室内には汗が浮かんでくるような暑気が満ちていた。

「私ね、今のが初めてじゃないんだ」

青空はぼつりと言葉を闇に浮かべた。その言葉はなんだか他人事めいていて、後ろめたさ、申し訳無さ、後悔、悲しみ、色々なものが混ざり合っていた。肌色をした彼女の輪郭が私の方に向き直る。わずかに差した明かりを背にして彼女の瞳は煌めいて見えた。

「……………私のは、父さんにあげちゃったんだ。ごめん」

それから青空はしやぼん玉のような声で話し始めた。今年の始めに実家に帰省した際に自分の父親に襲われたこと。それが原因となって声を失ってしまったこと。その時に父親が昔に別れた母親の名前を呼んでいたこと。恐怖で何も言えなかった傍らに、例え代替品であったとしても家族としての愛情を向けられていたことに安堵していた自分がいたこと。何度も何度も途切れながら、ずっと自分の中で隠し通してきたことを。もしも私達の人生を取り替えらることができたなら。彼女が寂しげに呟いたその言葉が肺の中でくすぶった。

「こんなことになったのは、何もかも私のせいなんだ。私が自分のお腹に包丁を突き立ててみたいに、父さんもきつとどうしようも無いくらいに追い詰められていたんだよ。

私のことでたくさん苦しめてしまったから。だから、明日の朝、家に帰って父さんに謝ろうと思う。どれだけ謝ったって、それだけでは全く足りない。けれど、何もしいないんてことは許されないんだ。本当に助けを求めていたのはあの人の方だったのに、そんな父さんを私は見捨てて逃げ出してしまったのだから。きつと、私が話せなくなったのはその罰なんだよ」

懺悔に近いようなその独白を私は何も言わずに聞いていた。暗闇の中から彼女の手を探り当てて強く握る。暗がりには顔を歪ませた青空の姿が映っていた。彼女がこんなにも声を震わせているのは、温かい何かがこの指を伝っていくのは、これも彼女への罰だからなのだろうか。誰が与えた訳でもない、この救われることの無い罰の。

「私も背負うよ。青空の罪を。いつかそれが許される時が来るまで。いつか青空が自分を許せるようになる日まで。一緒に背負うよ」

彼女の小さな肩を抱き寄せる。たった一人で肩代わりするのではなく、相手に委ねるでもない。どちらかが全てを負うのではなく、ただ共に分け合っていくこと。たったそれだけのことが私達はずっとできなかつた。そして、それが私達に足りなかつたものだった。

「もう、どこにも行ったりしない？もう二度と、離れ離れになつたりしない？」

「約束する。例え何があったとしても、私はいつまでも青空の隣にいる」

『もう、決してひとりぼっちにはさせない』。誓うようにそう言葉を継いだ。それに答えるように青空の手が首筋に回される。彼女の傷痕をそつと撫でると青空は『くすぐったいよ』と微笑んだ。

「…また、約束が増えたね」

嗚咽の中に柔らかい声が混ざる。皺だらけのシートの上ではどこからかほのかに石榴の香りがしていた。

バスを降りた頃に――はもう外は暑さの盛りを越えていた。焼けたアスファルトの匂いが生暖かい風に運ばれて鼻腔を掠めていく。先程まで式場で感じていたあの肌に馴染まない空気がまだ喪服に纏わり付いているような気がした。

「ごめん。待たせちゃったね」

駐車場のすぐ前にある小さな公園のベンチに寝転んだ青空の姿を認め手を上げる。吊り下げた飲みかけのペットボトルが気味の良い音を立てた。公園の中にただ一つ置かれたブランコの隣で彼女は空に浮かぶ背の高い雲を望んでいた。その中を通り抜けるように一筋の飛行機雲が建物の遙か上を過ぎっていった。

「思っていたよりも長引いちゃって。帰りの時間もあるからって無理を言っただけ出し

てきちやつた」

キャップを捻つて容器に残つた水を全て飲み干す。水は道中の自動販売機で買った時よりも少しぬるくなつていた。仰いだ視線の先には透明な容器の中を屈折して煌めく散光と、その先に覗く遠くまで澄んだ突き抜けるような青い空があつた。

「少し、歩かない？この町を出ていく前に」

青空は返事の代わりにゆつくりと身を起こしてキャリーケースの取手を掴んだ。その中に入っている携帯電話の電源はきつと切れていることだろう。彼女の表情に以前のような陰りはどこにも無かつた。

通りを逸れて閑静な住宅街を抜けていく。道を行けば行く程に人通りは減つていった。傾き始めた日光が電信柱の影を伸ばしていく。ブロック塀を渡る淡い色をした蝶は太陽と並んで飛びながら、やがて何かを取りに帰るように翻つてどこかへと向かつていった。

「明日からはまたいつも通りの生活になるけれど、これといつて何かが変わつた訳ではなかつたよ。父への思いも母との関係も。すべてがこれまで通りだった。家を出たあの頃と同じままだったよ。今日も明日も、その明日も、少しずつ変わっていく『いつもの生活』がずっと続いていくんだな、つて」

思つたことや感じたこと、そのどちらにもならなかつたことを歩きながらたくさん口

にした。この散歩に行く先など無かった。私も青空も、ただ何かを探し当てるように足を動かしているだけだった。そうしていると、いつしか私達はあの電話ボックスの前で立ち止まっていた。

「今でも、たまに想像するんだ。私が無くした家の鍵の行方について。あれだけ探し回っても見つからなかったあの鍵は今どこにあるのだろうか。きっと清掃業者の人にも拾われたのだろうか」

「あれはね、私が持っているんだ。今もこのケースの中に入っているよ。あの夜の後、有理奈の服を干している時にズボンのポケットの中から見つけて、それからずっと返せずにいたんだ。あの鍵だけがあの約束があったことを証明できる気がして。今まで隠していてごめんね。もう、有理奈に返すよ」

青空はケースを地面に置いて中身を開いた。そして小さな巾着袋を取り出して不慣れた手付きで探した。まるであの夜のように周囲には誰もいなくなっていた。伸びた影と広がった影と、同じ方角を向いた二人分の影法師を見つめる。その先はきつとあの頃よりも遠くまで届いていた。

「…父さんと会ってきたよ。最後に会ってからまだ半年しか経っていないのにずいぶんと細くなっているね。なんだかかわいそうだった」

「そう。青空はきちんと向き合うことができたんだね。『家族』という存在と。私にはで

きなかった」

「そう、だったのかな：父さんを見た時ね、『私は青空だよ』って。なぜだかそう言っていたんだ」

彼女の影が微かに揺れる。その音の波間では迷いと確信とがせめぎ合っていた。不意に蝶が真つ白な二対の翅をはためかせながら視界の中心を横切った。何気無くそれを目で追うと蝶は東の空に上る大きな雲を追いかけて飛んで行った。

「悪いのは私のはずなのに、謝ったのは父さんの方だった。『酷い目に遭わせてしまった』って。その一言で何も分からなくなっちゃって、謝ろうと思っていたはずなのに私はただ『許すよ』と、そう言っただ。私がそう言うことで父さんが救われるのならと思つて。そのまま最後まで『ごめんなさい』が言えなくて、帰り際に『また会えるよね』なんて訊いたらね、『それを望んでくれるのなら』って。それで終わり。これでよかったのか、私には分からない。自分がどうしたかったのかさえ、何も」

彼女はそこで投げ込むように『あつたよ』と呟いて言葉を途切った。彼女はしばらく何も言葉を発さずに手の中のそれを見つめていた。それから何かを確かめるように小さく頷いて、口が空いたままの巾着袋をキャリーケースの中に放り込んだ。その背中には淡い決心の色が滲んでいた。

「だけどね。なんだか心が軽くなった気がするんだ。少なくとも、ここに来る前よりは」

青空がケースの蓋を閉めて腰を上げる。鍵のかかる音の隣でどこからか窓を開く音が聴こえていた。電話ボックスの緑色の受話器が景色に溶け込んで段々と遠ざかっていく。こちらに向き直った彼女の表情はこの晴れた初夏の空のように清々しかった。

「思い返してみると、私は『家族のかたち』に固執していたのかもしれない。自分の中で作り出された理想を求め続けて、そして苦しみ続けていた。あの夜よりもずっと前から、これまで、ずっと。だけど、それももう今日でおしまい」

涼やかな優しい風が青草の匂いを連れて私達の間を通り抜けていく。彼女の顔には純真な笑みが浮かんでいた。春の曙光に晒された雪のような脆さを抱えながら、けれどもその下に芽吹いた萌芽のようにしっかりと根を張って。

「『家族』のかたちについて、一つだけじゃないんだよ。きつと。だから、ありもしないあべき姿を決める必要なんて無かった。他の誰かに認められたりするんじゃないくて、自分達が家族だと認め合うことが、それが一番大切だったんだ」

差し出された手にはもういらなくなったあの家の鍵が握られていた。夏の訪れを感じさせるような硬い日差しが地面の上を焦がしていく。鍵は時と共に古ぼけて錆を浮かべながら、光を受けて眩いくらいに輝いた。

「そろそろ、帰ろうか」

「うん。帰ろう」



最後に左手を宙に垂らしたままひらひらと揺らして踵を返す。あの町に帰ればすぐに一日が終わり、そしてまた新たに一日が始まるだろう。同じものなど一つとして無い一日が。ポケットの底に落とした鍵が入れたままだった硬貨と触れてくぐもった軽い音を立てる。その音は柔らかな感傷を伴って掌の内に解けていった。

西の空に夕焼けの色が薄く滲み始める。その背では一つになった二つの影が太陽の昇る方へとまっすぐに続いていた。

帰り道の途中で寄り道をして電子ピアノを買った。スタンドの無い型落ちのキーボードで、売れ残って値引きされていた物だった。本当は弦の張ったきちんとしたピアノの方がよかったが、そう簡単に買える物ではないし、置き場所や騒音のことを考えるとこちらの方が優れていたのだ。

「本当によかったの？他にももつと良い物があつたのに」

青空の声帯が揺れているのが背中越しに伝わってくる。机の上から伸びたキーボードのコードは青空を避けてカーペットに横たわっていた。もう少しすると明日が今日になる。そんな取り留めの無い感慨が微かなビーフシチューの香りと共に室内に漂っていた。

「これでいいんだ。またピアノが弾けるなら。そうだ。右手がまた動かせるようになって、青空も弾いてみようよ。楽譜の読み方は私が教えるからさ」

「私はいいいよ。そういう複雑なのは向いていないから。それに、私は有理奈が弾くピアノを聴いている方が好きかな」

「そう言われると、なんだか恥ずかしいな」

接続端子に繋いだイヤホンの片側を右耳に付ける。視界の端の彼女はもう一つを自身の左耳に押し込めた。テンポをリードするつまみや音色を変えるボタンなどには触れなかった。私はただもう一度、あの頃のように自由に演奏してみたかったのだ。

「……こうしていると昔を思い出すね。放課後はずっとあの音楽室で練習していた」

西日の差し込む夕焼け色の世界を瞳の裏にうつすらと浮かべる。誰もいない部屋の中で青空と私、二人だけが背を向けあつて座っているあの空間を。そしてそこでピアノを弾いている自分の姿を。全ては、かつてそこにあつた光景だ。

「最後にピアノに触れてから数年は経ったから、ちゃんと指が動くかな」

「きつと弾けるよ。それに、仮に間違えたって気にすることはないよ。この部屋にいるのは私と有理奈だけなんだから」

「そうだね……うん。もしも間違えたら、その時はまた、やり直すよ」

あの頃のことを思い出すように中央の鍵盤を一つ押す。プラスチックで作られたそれは私が想像していたよりもずっと軽く、底まで沈んだ白鍵がフレームに当たってかちりと音を立てた。やはり木製の鍵盤とは、夢で触れた鍵盤とは少し勝手が違うようだつ

た。

「ちやんと聴こえているかな？音が大きかったら言つてね」

「大丈夫。綺麗な音だね」

その指でモノトーンの平らな階段を上つていく。右耳から聞こえてくる無機質な音は人工的でありながら、どこか温かみを持つているように感じた。新しいピアノは慣れ親しんだものとはかなり異なっているけれど、この両手に馴染むにはそれほど時間がかからなかった。

ここには防音加工の壁なんて物は無いし、目の前にあるそれだつてグラランドピアノと比べたら遥かに安上がりな物だ。それでも、今は預けられたこの背中で彼女の鼓動を感じている。夢の中で見た景色とは遠くかけ離れているけれど、足りないものはもう何も無かった。

「よし。慣らしはもうこれくらいでいいかな」

「何を弾くの？」

最初に何を弾くのかはこのキーボードを買った時に、あるいはそれよりもずっと前から決まっていた。『子供の情景』。このメロディを捧げよう。青空に、結花に、母に、もうどこにもいない父に、そして何よりも過去と今の私自身に。

「今の私のすべてを」

両手を軽く引いて初めの音に合わせる。今度はきつと手を止めはしない。昨日までのために。そして明日からのために。小さく息を吸ってから、私は人差し指にそつと力を込めた。

『この世界は誰しにも苦しみを与える。』そう言った誰かがいた。

その人はそれからこう続けた。『そして、その中から強くなる者もいる』と。

「ねえ、青空」

「何？」

いつか、この日々を懐かしむことができるようになった時、私達は強くなれているだろうか。その答えが出るのはまだ、今日ではない。たくさんの今日が昨日になればきつと、それが分かる日が来るのだろう。時間とそれ以上にたくさんのもの達が、いつかこの問いかけの結末を教えてくれるはずだ。

けれど、今の私は思うのだ。例え強くなれなかつたとしても、それは決して悪いことではないのだと。弱いままだからこそ気付けるものがあり、分かることがあるのだと。見えない傷の痛みのように。触れ合った心の温もりのように。

「……おかえりなさい」

イヤホンを外して顔を上げる。私からは見えなくとも、きつと青空もそうしていた。それぞれの視線の先にある物は違っていても、私達には同じ情景が見えていた。決して

何にも遮られることの無い、小さな光の河の流れる空が。  
「ただいま。有理奈」